

創世記

第一章

○愚なる者は心の中に神無しと云へり。彼等は腐れたり。善を行ふ者無し（詩一四一）。

1 「元始はじめに神天地を創造つくたまへり」

○神 I am that I am 在りて在る者。無窮の実在者。

○創造、無きものをあらしむ。

○聖書の始は、神天地を造り給へり（旧約）。主イエスよ来りたまへ（黙示録）聖書の終。

○自然に出来たのではない。無意味につくつたのではない。そこに尊き法則がある。

○これ単に神話ではない。

2 「地は定形かたちなく曠空むなくして黑暗淵やみの面おもてにあり神の靈水れいみずの面を覆たりき」

「地」○直径八千哩、周囲二万五千哩。

「神の靈水の面を覆たりき」

○流動

○鶏が卵をいだく如く。

4 「神光を善と観たまへり神光と暗やみを分ちたまへり」

「善と観たまへり」○満足せり。

5 「神光を畫ひると名け暗を夜と名けたまへり夕あり朝ありき是首はじめの日なり」

「夕あり朝ありき」○ユダの一日は日没に始まり、日没にいたる。

11 「二神言たまひけるは地は青草と實たねを生ずる草蔬くさと其類るゐに従ひ果を結びみづから核たねをもつ所の果を結ぶ樹を地に發出いだすべしと即ち斯なりぬ」

「みづから核をもつ所の果を結ぶ樹」

○核を其内にもつ…。

○高等植物

14 「四神言たまひけるは天の穹蒼おほぞらに光明ひかりありて晝と夜とを分ち又天象しるしのため時節ときのため日のため年のために成べし」

「天の穹蒼に光明ありて」

○石炭時代、蒸気、雲、霧漸く晴れて、日月星辰始めて天に現れたり。

○太陽は地球の百二十万倍。

20 「神云たまひけるは水には生物いきものさわ饒にに生じ鳥は天の穹蒼の面に地の上に飛べしと」

「水には生物」○生物、サンゴ、ウミユリ等、カイ類、クラゲ。

21 「<sup>三</sup>神<sup>おほい</sup> 巨<sup>うを</sup>なる魚と水に饒に生じて動く<sup>すへて</sup> 諸の生物を其類に従ひて 創造り又<sup>つく</sup>羽翼<sup>つばさ</sup>ある諸の鳥を其類に従ひて 創造りたまへり 神之を善と觀たまへり」

「動く諸の生物」○鱈一尾にて四百万粒の卵をうむ。悉く生長せば、一尾の雌魚より二十年にして地球の重さの五百万倍する鱈を産むべし。

24 「<sup>四</sup>神言給ひけるは地は生物を其類に従て出<sup>は</sup>し家畜と昆虫<sup>はちむしの</sup>と地の獸を其類に従て出<sup>だ</sup>すべしと即ち斯なりぬ」

「昆虫」○昆虫とは一説に四足に歩く小動物、たとへば鼠などを云へりと。爬虫類なるべし。

26 「<sup>六</sup>神言給けるは我儕に象<sup>かたど</sup>りて我儕の像<sup>かたち</sup>の如くに我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍<sup>は</sup>ふ所の諸の昆虫を治めんと」

「我儕に像て我儕の像の如く我儕人を造り」

○人の肉体は獸の如く動物的なりとするも靈魂は神的なり。

○人は元來肉食動物として造られたるに非ず。他の動物も亦然るが如し。

○イザヤ一七に、獅子も牛の如く藁を食ひ云々とあり。

28 「<sup>八</sup>神彼等を祝し神彼等に言たまひけるは生<sup>ふえ</sup>よ繁殖<sup>ふえ</sup>よ地に滿盈<sup>みて</sup>よ之を服<sup>したが</sup>從<sup>は</sup>せよ又海の魚と天空<sup>そら</sup>の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ」

「生<sup>うめ</sup>よ繁殖<sup>ふえ</sup>よ地に滿盈<sup>みて</sup>よ」○世界平均一方哩三十人、ベルギー三百五十人、十倍。

第二章

○第二章は単に第一章の続きに非ずして更に之を細説する也。即ち主として人類の歴史を説く也。

1 「斯天地および其衆群悉く成ぬ」

〔成ぬ〕 ○完成せり。

〔衆群〕 ○衆群、日月星辰禽獸草木なり。

3 「三神七日を祝して之を神聖めたまへり其は神其創造爲たまへる工を盡く竣て是日に安息みたまひたればなり」

○神聖は聖別也。神エレミヤに云ひけるは、我れ汝が胎を出でざりし先に、汝を聖め汝を立て、萬国の預言者となせりと。

○安息は単に休息する意に非ず。形而下の創造を了りて、形而上の働き即ち第二期に入り給へる也。イエス曰く「我父は今に至るまで働き給ふ。「我も亦働く也」(約五17)。

4 ○宇宙完成の紀念祝日なり。物質的造化を竣へて心靈的事業に入れる也。神と共に働くは労働に非ざるなり。「エホバ神地と天を造りたまへる日に天地の創造られたる其由來は是なり」

〔エホバ神〕 ○一章に神をエロヒムと云ふ。力の神也。二章に始めてエホバと云ふ。恩恵の神也。即ち茲に始めて人類の歴史に入るを知るべし。

5 「五野の諸の灌木は未だ地にあらざ野の諸の草蔬は未生ぜざりき其はエホバ神雨を地に降せたまはず亦土地を耕す人なかりければなり」

「土地を耕す人なかりければなり」○其成れるは三日第三紀

7 「エホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ」  
「生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ」

○第六紀

○人は動物と異り、萬物の靈長たる所は、其吹入れられし生氣に存す。

8 「エホバ神エデンの東の方に園を設て其造りし人を其處に置たまへり」

「園」○園はオアシスの如し。

9 「エホバ神觀に美しく食ふに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善惡を知の樹を生ぜしめ給へり」

「美しく食ふに善き各種の樹」○サクラ、モミジ、クリ、クルミ、カキ、モモ、ナシ、ミカン

「生命の樹」○トパンの木

「善惡を知の樹」○誘惑の木、戒の木、人の善惡知の木

10 「エホバ神より出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり」

「河エデン」○アツシリヤ語平原

12 「三其地の金は善し又ブドラクと碧玉彼處にあり」

「ブドラク」○ゴムの一種

13 「三第二の河の名はギホンといふ是はクシの全地を繞る者なり」

「クシ」○ナイル河の上流

14 「四第三の河の名はヒデケルといふ是はアッスリヤの東に流るるものなり第四の河はユフラテなり」

「ヒデケル」○チグリス

15 「五エホバ神其人を掣とりて彼をエデンの園に置き之を理をさめ之を守らしめ給へり」

「埋め」○埋め、整理、守り、保存。人類世界に住むに方り神に対する義務また然り。

16 「六エホバ神其人に命じて言たまひけるは園すべての各種の樹の果は汝意こころのままに食くらふことを得う」

○人は自由なりと云ふ。然れども絶対に自由なるものに非ず。神の命に背きて絶対の自由を求むる時に、人は墮落に陥る也。

19 「九エホバ神土を以て野すべての諸の獸そらと天空の諸の鳥を造りたまひてアダムの之を何いかと名なるかを見んとて之を

彼 の所に率あいたりたまへりアダムが生物いきものに名けたる所は皆其名となりぬ」

「アダム」○アダムとは土の意也。即ち前の人と同語也。希臘語にては、人とは上を仰ぎ見る者の意。英語の

マンは思考ある者の意也と云ふ。

「名く」○名なくるとは解説するの意。彼をして天然を学ばしむる也。天然は人の善き友なれども、我等の心を

會得する同情者には非ず。

21 「三是に於てエホバ神アダムを熟ふかく睡らしめ睡りし時其肋骨あばらほねの一を取り肉をもて其處を填塞かみたまへり」

○ヘブル語にては男を ish と云ふ。之を女性的とせる ishah 也。神はアダムに (原本 イサ) エバ を紹介するにあたりて之を眠らしめ幻影のうちに其相愛り相寄るべき真理を知らしめたまひしならん。

22

「三エホバ神アダムより取たる肋骨を以て女を成りつく之をアダムの所に携つれきたりたまへり」

○何物か人体にまさりて優美なるものあらんや。汚れたる考えを以て見る時に、清き者も汚れを感じる也。色

眼鏡の如し羞恥の念は罪を犯してより後に□したるものなり。先ず□をきよむべき也。

24

「二四是故に人は其父母を離れて其妻に好合あひ二人一體となるべし」

「二人一体となるべし」○二人一体とならんと欲する。

## 第三章

○神によらずして己の知恵を以て善悪を判断せんとす。而して其事が如何にも誇るべき善きことの如く見ゆ  
(六節)。

○エレミヤ記二13、我民は二つの悪事をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて、自ら水溜を掘れり。即ちやぶれたる水留にして、水を持たざるものなり。これすべての悪事の根源なり。

6 「をんな婦樹を見くわいば、くわい食に善く目にうるは美麗しく且かしこ智慧からんが爲にした慕はしき樹なるによりて遂に其み果實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫にあた與へければ彼食へり」

○女子は男子よりも誘惑に陥り易し。是れ虚栄を愛するによるか、又理をのちにして感情を先にするに依る。  
○女子は虚栄を満足せんとし、男子は其愛に溺れて一家滅亡に陥る例多し。悪魔は此弱点に乗じて女を惑はしたり。

7 「七是において彼等の目とも俱ひらけに開て彼等其はだか裸體なるを知り乃ちいちじく無花果樹の葉を綴もて裳もを作れり」

○目開けてとは、其考えが忽ち変りたるなり。潔き人には凡ての物潔し。心に主たる神を捨て、人は神聖なるべき身体につきて愧るに至る。

8 「八彼等園の中に日の清涼すずしき時分歩ころみたまふエホバ神の聲こえを聞しかばアダムと其妻即ちエホバ神の面かほを避て園の樹の間に身を匿せり」

○愛すべき神は、罪を犯してより恐るべきものとなれり。世に神無しと云ふは、自己の罪の現れんことを恐れてなり。凡て悪をなす者は光をにくみ、其行のとがめられざらんが為に光にきたらず（約三<sup>ヨハ</sup>19）。

○静なる時、良心覚醒す。

10 「二。彼いひけるは我園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと」

○ありのままは心の美なるしるし。修飾は常に墮落の徴也。

○汝何故裸なるを口実としてわが前をさげんとするや。

12 「三。アダム言けるは汝が與て我と偕ならしめたまひし婦彼其樹の果實を我にあたへたれば我食へりと」

○汝は我命に叛きし者に非ずや。神に心中を看破されしアダムは、自己の罪を他に嫁せんとせり。世に罪を他人に負はしめて、自身潔白を装ふ事多し。妻はまた罪を蛇に帰せり。

15 「<sup>二五</sup>又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔<sup>ナズ</sup>の間に怨恨<sup>ウラミ</sup>を置ん彼は汝の頭<sup>カシラ</sup>を碎<sup>くだ</sup>き汝は彼の踵<sup>くびす</sup>を碎かん」

○女の胎に宿りし者終にゴルゴダの丘に於てサタンに勝てり。人類救済の約束は此に始れり。然れども其勝利の實の擧るまで、人類は其犯せし罪の為苦しまざるを得ず。

○神の命を信じ、劣つた信をはなれたるとき、愛と望は与へられた。

第四章

○カインとアベルとは其誠意を異にせり。人はすべての物をより受くるものなれば最も善き物を献るべきに、大抵カインと同じく餘り物を献ぐを常とす。神の喜び給ふは謙りたる魂なり。

○詩五〇17、自ら省みずして神をうらみ弟を嫉めり。

1 「アダム其妻エバを知る彼孕みてカインを生みて言けるは我エホバによりて一個の人を得たりと」

「カイン」○カインとは賜物の義なり。彼に感想の念存せり。

2 「彼また其弟アベルを生りアベルは羊を牧ふ者カインは土を耕す者なりき」

「アベル」○アベルとは、疲労の義也。アベルは寡欲の人。カインは多欲野心の人なりき。

3 「三日を経て後カイン土より出る果を携來りてエホバに供物となせり」

○供物は感恩の記念なり。人に最も必要なるは酬恩の念也。世に無益なるものとして感謝の念を伴はざる供物の如きは無し。義務的慈善の如き皆カインの供物也。

6 「エホバ、カインに言たまひけるは汝何ぞ怒るや何ぞ面をふするや」

「面をふする」○失望

7 「汝若善を行はば擧ることをえざらんや若善を行はずば罪門戸に伏す彼は汝を慕ひ汝は彼を治めん」

○怒る勿れ、悪をなさざれば足る。善をなさざれば罪惡起り来る。聖書は始めより積極的の道徳を教ふる書なり。

「擧る」○面を

8 「八カイン其弟アベルに 語<sup>ものがた</sup>りぬ彼等野にをりける時カイン其弟アベルに起<sup>たち</sup>かかりて之を殺せり」

○カインは終に神の聖諭をさとることを得ざりし。

○アベルの清浄に対して汚濁に□ゆること能はざりしカイン、義人迫害者の祖先なり。神はカインをして其罪悪を自白せしめて之を赦さんとせり。彼は□の慈□とさと□殺□ぐに偽証□なり。彼は全くの個人主義也。社会の根底を破る者也。

10 「二エホバ言たまひけるは汝何をなしたるや汝の弟の血の聲地より我に叫べり」

「汝の弟の血の聲地より我に叫べり」○血痕歴然として声あるが如し。確証を如何せん。

12 「三汝地を耕すとも地は再其力を汝に效<sup>いた</sup>さじ汝は地に吟行<sup>さまよ</sup>ふ流離子<sup>さすらひびと</sup>となるべしと」

○神よりのろわれ、又地よりのろわれたり。彼に喜びと満足となく憂愁を食ひてさすらいびととなるべし。

13 「三カイン、エホバに言けるは我が罪は<sup>おほい</sup>大にして負ふこと能はず」

○カインは真にくだい改めしに非ず。只恐怖して減刑を乞ひ、且つ物質の損（不明）人を殺して己れの殺さるることを恐れた。

16 「六カイン、エホバの前を離て出でエデンの東なるノドの地に住り」

○神の善人は殺されて、地は遂に悪人の有に帰せり。地上に於ける悪人の跋扈は今日に始まるに非ず。悪人の為に処を儲くる（不明）。良き処を備へ給はざらんや。

「ノド」○ノドは追放の義なり。一説に支那人。

17 「七カイン其妻を知る彼孕みエノクを生りカイン邑まちを建て其邑の名を其子の名に循したがひてエノクと名なづけたり」

○邑は殺人者の建てたるものなり。都邑は罪惡の枢府也。其処に住める者の挙動の優美なるを以て貴しと思ふべからず。天然を去ること□遠く、俗智のみ長じ、誠実に代ふるに虚靈礼を以て天真なるを野蠻と称せり人の造りし習慣を以て、神の造りし天然の法則に代ふる者なり。多妻も亦罪人の裔によりて始められたり。妻妾を蓄ふものは、多くの人を殺すものなり。軍人程古来多の妻女を畜ふるもの無きを思ふべし。

19 「九レメク二人の妻を娶れり一の名はアダと曰ひ一の名はチラと曰り」

「アダ」○かざり

「チラ」○かざり

20 「二〇アダ、ヤバルを生めり彼は天幕に住て家畜を牧ふ所の者の先祖なり」

「ヤバル」○後のベドイン族なりて、旅人の掠奪に従ひし者はこの徒ならん。(以下、不明)

21 「三其弟の名はユバルと云ふ彼は琴と笛をとる凡ての者の先祖なり」

○美術勝つ時は信仰の衰ふる時也。エレミヤ、コロンウエル、ジョージ・フォックス皆美術を排斥せり。

22 「三又チラ、トバルカインを生り彼は銅あかがねと鐵てつの諸もろもろの刃物を鍛たがふ者なりトバルカインの妹をナアマといふ」

○殺人は容易なる業となれり。

「ナアマ」○愛嬌

23 「三レメク其妻等に言けるはアダとチラよ我聲を聴けレメクの妻等よわが言を容いれよ我わが創傷いたでのために人を殺すわが瘻きづのために少年を殺す」

○最初の詩歌、レメクのツルギのうた。

25

〔<sup>二五</sup>アダム復また其妻を知て彼男子を生み其名をセツと名けたり其は彼神我にカインの殺したるアベルのかはりに  
他ほかの子を興たねへたまへりといひたればなり〕

〔セツ〕○代用

26

〔<sup>二六</sup>セツにもまた男子生れたりかれ其名をエノスと名けたり此時人々エホバの名を呼ことをはじめたり〕

〔此時人々エホバの名を呼ことをはじめたり〕○最初の信仰復活

第五章

1 「<sup>一</sup>アダムの傳でんの書ふみは是なり神人を創造つくりたまひし日に神に象かたどりて之を造りたまひ」

〔傳の書〕○傳の書とは子孫の意即ち系図なり。

〔アダム〕○アダムは人類の意、亦は造られたるもの美しきもの、群居するものの意。

2 「<sup>二</sup>彼等を男女に造りたまへり彼等の創造られし日に神彼等を祝してかれらの名をアダムと名けたまへり」

○アダムは永久に生命を与へられたり。其（不明）。

3 「<sup>三</sup>アダム百三十歳に及びて其像したがに循したがひ己に象りて子を生み其名をセツと名けたり」

〔像〕○肉体

〔象りて〕○靈性

〔セツ〕○セツはアダムの再生也。靈肉両ながら甚だ父に似たり。最長命なりしはメトセラ也。

最短命なりしは三六五才のエノクなりし也。其他は悉く死ねりと云ひ、エノクは苦しき死の門をくぐらずして、他界に移されたり。キリスト以前の昇天の実例なり。

24 「<sup>四</sup>エノク神と偕に歩みしが神かれを取りたまひければをらずなりき」

○幸なる哉、エノク、されど吾らには汝の知らざる仲保者あり。吾らは恐怖なくして死の川を渡り得るなり。

25 「<sup>五</sup>メトセラ百八十七歳に及びてレメクを生り」

〔レメク〕○レメクに至りて人類の墮落腐敗益甚だしく、比較的善良なりしセツの子孫すらエホバの咒詛を感ず

るにいたれり。

「メトセラ」○メトセラをとけば槍の人の意。レメクの掠奪者の意なり。如何に殺伐の気風をおび来りしかを察すべし。

28  
29 「二八レメク百八十二歳に及びて男子を生み<sup>二九</sup>其名をノアと名けて言けるは此子はエホバの詛ひたまひし地に

由れる我<sup>わがはたらき</sup>操作と我<sup>ほねをり</sup>勞苦とに就て我らを慰めん」

○神を忘れたる労働は苦痛也。空虚也。涙也。レメクは靈感に依りて世は彼の生みたるノアによりて、慰籍が世に供せらるるを知れり。ノアは其時代の人類の希望なりき。而して人類に下りし最初の大改革は其時に来れりき。

「ノア」○ノアとは安息の意也。

第六章

○生めよ繁殖よ地にみてよと。されど神をはなれたる繁栄は詛ふべきものなり。世の始めより神の子と人の子とありき。人の子は此世の人即ち俗人にしてアベルの兄カインの子孫なり。神の子は神に奉仕するを希ふ者なり。神の子其特権を失ひて此世の子のなす所にならひ、此世の勢力に依らんとすれば、鹹味を失へる塩の如く神のにくみ給ふ所となる。まして信仰の如何をとはず容色装ひて、貴き結婚をなす神の失望し給ふもむべなり。かゝる者に長命を与ふるも何の甲斐なし。

4 「四當時このころ地にネピリムありき亦そのち其後こゝち神の子輩むすめ人の女の所いに入りて子女こどもを生しめたりしが其等も勇士にして

いにしえ 古昔な の名聲なある人なりき」

「ネピリム」

○ネピリムは巨人也。身長一丈以上偉丈夫にし腐敗漢なりき。女子は美人にして男子は偉丈夫なりき。神の子は其偉觀を（不明）んで、其女を娶り之にネピリムの子を生ましめき。

而して其子等は皆偉丈夫なる勇士にして墮落漢也。

9 「九ノアの傳は是なりノアは義人たがしきひとにして其世の完全まっつたき者なりきノア神と偕に歩めり」

○傳の書は系図。傳は畧傳なり。ノアの傳は神の恩恵によりて人類歴史の一部分となれり。神の子が人の子と合同和楽せる時、ノアは獨り儼然として神の子たる品性を維持したり。

幸なる哉三人の子も其父と信仰を偕にせり。

12 「三神世を視<sup>みる</sup>たまひけるに視<sup>みる</sup>よ亂れたり其は世の人皆其道をみだしたればなり」

○暴虐地に満たり。ネピリム族に跋扈し、人は法を重んぜずして腕力（武力）にのみ頼れり。

沸王ルイ十四世死にのぞみ大息して曰く「我後に洪水来らんと」而して幾もなく大革命の洪水は来れり。

14 「二汝松木をもて汝のために方舟<sup>はこぶね</sup>を造り方舟の中に房<sup>ま</sup>を作り瀝青<sup>やに</sup>をもて其内外を塗るべし」

○瀝青は植物性に非ず、礦物性の物也。

（來一七）ノアは未だ見ざることの示を蒙り、つゝしみて其家族を救はん為に舟を設けたり。之に由りて

世の人の罪を定め、また信仰に由れる義を受くべき嗣となれり。されど一人の義人なきにあらず。ノアこれなり。一人の義人によりて天然物も人類も全滅を免れたり。

15 「二五汝かく之を作るべし即ち其方舟の長<sup>ながさ</sup>は三百キュビト其潤<sup>ひろさ</sup>は五十キュビト其高<sup>たかさ</sup>は三十キュビト」

○キュピトとは掌の幅の倍なり。約一尺（不明）寸。方舟は長（不明）十間也。幅（不明）高さ（不明）間。

第七章

11 「二ノアの齡よわひの六百歳の二月即ち其月の十七日に當り此日おほわたに大淵おほわたの源皆潰やぶれ天あまの戸開けて」

○海嘯はペルシヤ灣より來り。

21 「三凡そ地に動く肉なる者鳥家畜獸地に匍はふ諸すべての昆蟲ものおよび人皆死り」

○彼らは神の名を呪い詛ひし叫びしなるべし。而して死ぬるまで其罪を悔いざりしなるべし。

劍に誇る者智に誇る者己の義に誇る者はすべて死し、謙退以て神に依り頼みしノアの一族のみ残れり。

ノアの時の如く人の子の來るも亦然らん。

第八章

4 「方舟は七月に至り其月の十七日にアララテの山に止りぬ」

「アララテ」○アララテの山は今日称する処のペルシャとチルコの境上に在る。高一万七千尺の高峯に非ず。ア

ララテはアルメニヤ地方の総称にして、方舟は其諸山の一に止りしなり。

7 「七鴉を放出ちけるが水の地に涸るまで往來しをれり」

「鴉」○鴉は人になつかざる鳥なり。不信恐怖の鳥なり。

8 「八彼地の面より水の減少しかを見んとて亦鴿を放出いだしけるが」

「鴿」○鴿は柔和なる鳥なり。

11 「二鴿暮におよびて彼に還れり視よ其口に橄欖の新葉ありき是に於てノア地より水の減少しをしれり」

「橄欖」○橄欖は平和の徴号なり。鳥は死魚にても食へるならんも、鴿は肉食鳥に非ざる故に便宜無し。橄欖は

此時より平和と救ひの記号となれり。

○ネピリムは亡びたり。

15 「五爰に神ノアに語りて言給はく」

「ノア」○ノアは、悪人は亡び、地は乾き、世界は彼の専有物となりしも、恣に方舟を出づることなく、慎みて

神の命令を待てり。

21

「三 エホバ其かうばし馨にほいき香かを聞かぎたまひてエホバ其意いに謂いたまひけるは我わが再び人の故ゆゑに因よりて地ちを誼いふことをせじ其は人の心の圖は維かるところ其幼少時おさなきときよりして惡あしかればなり又我曾またて爲なしたる如く再び諸もろもろの生いける物を撃うち滅ほろぼせし」

○新紀元は感謝祭を以て始まり。

父母が子を罰して後に感ずる如き悔を、神も感じ給へり。

第九章

○世界の人類を大別して四となす。セム人種、ハム人種、ヤペテ人種、ツラン人種である。

而してヤム、ハム、ヤペテ人種は白色人種にして、ツラン人種は白色人種以外殊に黄色人種である。白色人種中最も優等なるはヤペテ人種にして、最も劣等なるはハム人種である。

ツラン人種にも文明なきに非ずと雖も、それは幼稚なるものにして、科学、思想、権利、自由等の純真理の領分に属するものなし。

ノアの洪水によりて亡されしはツラン人種であつた。ハム、埃及人、セム、バビロン、アッシリヤ、ユダヤ

11 「<sup>二</sup>我汝等と契約を立ん總て肉なる者は再び洪水に絶るる事あらし又地を滅す洪水再びあらざるべし」

○ノア及其他の生物にとりても、神の保証なくば、水を見る毎に雨に逢ふ毎に恐れ戦けるなるべし。而してかゝる契約は全く神の大なる慈悲にして、或は慈悲に過ぎずやと思ふほどの慈悲なり。キリストの福音に似たる所あり。

13 「<sup>三</sup>我わが虹を雲の中に起さん是我と世との間の契約の徴なるべし」

〔虹〕 ○虹は天と地を撃ぐ平和のしるしなり。

25 「<sup>五</sup>是に於て彼言けるはカナン<sup>カナン</sup> 詛はれよ彼は僕輩の僕となりて其兄弟に事へん」

○善きも悪しきも遺伝するものなり。

第一〇章

1 「ノアの子セム、ハム、ヤペテの傳は是なり洪水の後彼等に子等こども生れたり」

「セム、ハム、ヤペテ」

○セムは榮光、又有名の意。ハムは燒熱の意。ヤペテ擴張の意。セムはアジアの西部、ハムはアフリカ、ヤペテは歐羅巴を代表す。

2 「ニヤペテの子はゴメル、マゴグ、マデア、ヤワン、トバル、メセク、テラスなり」

「ゴメル、マゴグ、マデア、ヤワン、トバル、メセク、テラス」

○ゴメルはゴール。ナゴグはユダヤの北に（不明）マデアはメデア裏海南。ヤワンはギリシヤ。トバルは銅の意、銅山に有名、ロシヤの一部。メセクは黒海附近。

4 「四ヤワンの子はエリシヤ、タルシシ、キツテムおよびダダニムなり」

「タルシシ」○スペイン

5 「五くにくに是等より諸國しまの洲島わかの民は派分れ出て各其方言ことばと其宗族やからと其邦國くにとに循したがひて其地に住り」

「不明」黒□より□

「州島」○州島は海の意。

6 「六ハムの子はクシ、ミツライム、フテおよびカナンなり」

「クシ、ミツライム、フテ、カナン」

○クシはエチオピア人。ミツライムはエジプト、ミツライムとは城壁の意也。又低地の意、レバノンと地中海の沼の低地に住めり。フテはリビヤ、地中海附近。

カナンは服従者の意、ユダヤ人に放逐せるるまでパレスタインに住めり。

9 「九彼はエホバの前にありてちから權力ある獵夫かりうとなりき是故にエホバの前にある夫か權力ある獵夫ニムロデの如しといふ諺あり」

「彼」○猛獸の未だ跋扈せし時抜群の獵人なりき。

10 「二彼の國のはじまり起初はシナルの地のバベル、エレク、アツカデ、及びカルネなりき」

○シナルのユブライト、チグリス下流ニネベ、レオポテイリ（城外の意）、カラ、レセン四邑合して一大城邑となりしならん。

14 「四バテロス族びとカスル族およびカフトリ族を生りカスル族よりヘリシテ族いで出たり」

「ヘリシテ」○ペリシテとは移住民の義也。埃及より来りてパレスチナ平原に達せり。

15 「五カナン其ういし冢子シドンおよびヘテ」

「ヘテ」○ヘテは鼻高くして大唇あつく、ひげうすく皮膚黄色にして、常に長ぐつをはけり。

16 「六エブス族アモリ族ギルガシ族」

「アモリ」○アモリ人は、長頭、軟毛、碧眼、長身、力強かりき。ヨルダンの東にすめり。

18 「八アルワデ族ゼマリ族ハマテ族を生り後に至りてカナン人のやからひろが宗族蔓延りぬ」

「ハマテ」○ハマテはレバノンの北に住めり。ハマテ人即ちヤマト人にして、日本人なりとの説あり。

22 「三セムの子はエラム、アシユル、アルパクサデルデ、アラムなり」

「エラム」○エラム国はペルシヤの西部。

23 「三アラムの子はウヅ、ホル、ゲテル、マシなり」

「ウヅ」○ウヅはヨブの故郷にしてアラビヤの北部。

24 「二四アルパクサデ、シラを生みシラ、エベルを生り」

「シラ」○アツシリヤ

26 「二六ヨクタン、アルモダデ、シヤレフ、ハザルマウテ、エラ」

「ヨクタン」○ヨクタンはあらびやに住めり。

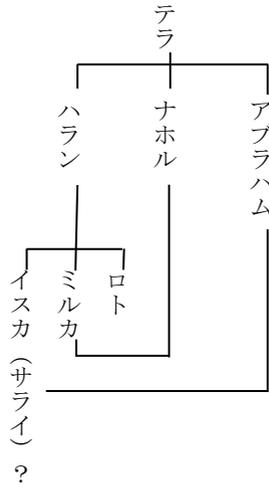
「ハザルマウテ」○ハザルマウテは死の庭のの義。アラビヤの南岸有名の温泉あり。

第一章

○神は神を離れたる人類の計画を破壊し給ふと同時に、自ら人類の結合の基礎を置く計画をなし給へり。即ちセムの後よりアラブハムを出して、イスラエルの歴史を始め、更にイエスキリストの降誕と再臨によりて最後に人類の眞正なる和合一致を実現せんと欲したまへり。

○ノア以前に比して人の寿命は大に短縮せり。

○アブラハムは高祖の意



29

「<sup>二九</sup>アブラムとナホルと妻を娶れりアブラムの妻の名をサライと云ナホルの妻の名をミルカと云てハランの女なりハランはミルカの父にして亦イスカの父なりき」

「サライ」○一説にサライはアブラハムの異母妹ならんと。此説可也（創二〇12）。

「イスカ」○イスカとサライは異名同人であつたか、其近親結婚は多分周囲の偶像信者との混合をさけん為なりしなるべし。

31

「<sup>三</sup>テラ、カナンの地に往<sup>ゆかん</sup>とて其子アブラムとハランの子なる其孫ロト及其子アブラムの妻なる其<sup>よめ</sup>媳サライをひき撃<sup>つれ</sup>て俱にカルデアのウルを出たりしがハランに至て其處に住り」

「カルデアのウルを出たりしがハラン至て」

○テラ家の故郷たるカルデアのウルは、有名なるバビロン市より遠からず。偶像崇拜の盛な地であつた。恰も名古屋の如く煩華なる不道德な所であつたらう。

カルデアのウルはペルシヤ湾より約百哩。ハランは道と云ふ意。カルデアにては月を神とする偶像教行はれたり。

第二章

○近親結婚もウルを去りし理由も、其腐敗をさけん為であつた。ピューリタンが英国を去つたもそうである。ハランはユーフラテ河の上流である。テラはウルの市民中より選抜され、アブラハムはテラノ一族中より選抜された。十二章一節は天照大神天孫に下せる勅に似て居る。

1 「<sup>二</sup>爰こゝにエホバ、アブラムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ」

○アブラハムは土地を見ずと雖も、神の言を信頼して行けり。最愛の妻を失ひて不義の礼物を受け、偶像崇拜者なるバロの叱責する所となるアブラハムが、如何に心に耻ちたるかを思ふべきなり。みな困難を恐れて約束の地を離れたる故なり。されど神危機一髪とほりの間に之を救ひ玉へり。

6 「<sup>六</sup>アブラム其地をとほり經過てシケムの處に及びモレのかしのき橡樹に至れり其時にカナン人其地に住り」  
「シケムの處に及び」

○シケムは肩の意。グリジムの肩にある故に名エルサレムの北五十四哩にあり。

○シケムの處はシケムの聖き処の意。及びはのちと読むべし。有名なる大木のありし処にして、アブラハムは後に祭壇を築きし処なり。後イエス、サマリヤの女と語りしヤコブの井のある近辺なりと云ふ。

10 「<sup>一〇</sup>茲に饑饉其地にありければアブラム、エジプトにとどま寄寓らんとて彼處に下れり其は饑饉其地に甚しかりけれ

ばなり」

「エジプトに寄寓」○エジプトに下りしは神命に非ず故に種々の困難にあへり。

13 「三 請ふ汝わが妹なりと言へ然ば我汝の故によりて 安やすらにしてわが命汝のために生存いきん」

○アブラハムは、又己れの生命を失はんことを恐れて偽りを語れり。

## 第三章

1 「アブラム其妻および其有る諸の物と偕にエジプトを出て南の地に上れりロト彼と共にありき」

○南の地とはエジプトより南の意にあらざ。一二6にあるモレのかしの木より南の意也。上るとはエジプトよりカナンのの地は高き故なり。彼はエジプトに行きしことを悔ひて、神の与へたまひし即ち指命したまひし地に返れり。かくて牧場と井とを得ること困難なるより争を生ぜし。アブラハムは叔父の権利をふるはず、謙遜にして親切なりき。誠に寛大の徳をそなへたりき。ロトは謙遜でなかつた。彼は肥沃の地をえらんだ。されど肥沃の地は罪惡の地であつた。

10 「是に於てロト目を舉てヨルダンの凡ての低地を瞻望みけるにエホバ、ソドムとゴモラとを滅し給はざりし。前なりければゾアルに至るまであまねく善く潤澤ひてエホバの園の如くエジプトの地の如くなりき」

「ソドムとゴモラ」○ソドムとゴモラは惡徳を以て有名な地であつた。

「エホバ」○エデン

14 「ロトのアブラムに別れし後エホバ、アブラムに言たまひけるは爾の目を舉て爾の居る處より西東北南を瞻望め」

○アブラハムの行は神の喜し給ふ所であつた。アブラハムは神より大なる祝福を与へられた。

18 「アブラム遂に天幕を遷して來りヘブロンののママレの橡林に住み彼處にてエホバに壇を築けり」

「ママレ」○ママレはモレよりはるか南方に在り。

第一章

○東方四人の王は聯合してカナンの地に侵入し、西方五人の王は聯合して之を拒いだ。

シデムの他には今の死海のある所也。エラムはメソポタミヤの東方に在り。

バビロンの主治者にしてケダラとはけらい(臣)。オメルは其崇拜せる神の名なり。

4 「彼等は十二年ケダラオメルに事へ第十三年に叛けり」

「彼等」とは西方の五小国なり。十二年前ケダラオメルに征服せられたるなり。

5 「第十四年にケダラオメルおよび彼と偕なる王等來りてアシタロテカルナイムのレパイム人、ハムのズジン、シヤベキリアタイムのエミ人」

「アシタロテ」○アシタロテはヨルダン川の東方バジヤンの市城にして、二つの角ある月即ち新月を意味す。

「レパイム人」○レパイム人とは偉丈夫の意なり。

「ズジン」○ズジンもヨルダンの東に住める巨人種族。

「エミ人」○エミ人とは恐しきと云ふ意にして、丈高く強力なる種族。

6 「およびセイル山のホリ人を撃て曠野の傍なるエルパランに至り」

「ホリ人」○ホリ人は洞穴に住む者の意。死海より南方アカバ湾に至るセイル山脈にすめり。

「エルパラン」○エルパランパランのカシ(樞)の意。

7 「七彼等歸りてエンミシパテ(即ち今のカデシ)に至りアマレク人の國を盡く撃又ハザゾンタマルに住るアモリ人を撃り」

「アマレク人」

○後日のアマレク人

○アマレク人はイシユマエルの子孫にして其当時其所にすめるには非ず。

「ハザゾンタマル」○ハザゾンタマルは棕櫚の枝をきるの意。

「アモリ人」○アモリ人は力強く丈高かりき。

10 「一〇シデムの谷には地瀝青の坑多りしがソドムとゴモラの王等遁て其處に陥りぬ其餘の者は山に遁逃たり」

「坑多り」○流出する坑多り

11 「二是に於て彼等ソドムとゴモラの諸の物と其諸の食料を取て去れり」

「諸の物」○人民男女

13 「二三茲に遁逃者來りてヘブル人アブラムに之を告たり時にアブラムはアモリ人マムレの橡林に住りマムレは

エシコルの兄弟又アネルの兄弟なり是等はアブラムと契約を結べる者なりき」

「ヘブル人」○ヘブル人とは彼方の人との意。

「マムレ」○マムレ人名變じて地名となれり。

17 「七アブラム、ケダラオメルおよび彼と偕なる王等を撃破りて歸れる時ソドムの王シヤベの谷(即ち今の王の谷)にて彼を迎へたり」

18

〔王の谷〕○王の谷とは諸王の墓あるより王の谷と云ふ。エルサレムの北ゲデロン川の上方の谷なり。

〔一八時にサレムの王メルキゼデク、パンと酒を携出せり彼は至高き神の祭司なりき〕  
もちいだ

〔メルキゼデク〕○メルキゼデクとは義の王の意。

〔サレム〕○エルサレムのサレムは平和。エルは市邑の意。

第一章

○信者のたては実に神自身である。アブラハムの望んでやまざるものは、其嗣子であった。七節以下は古代に於ける誓約の式である。之に類した式はギリシヤにも行はれた。

3 「三アブラム又言けるは視よ爾子<sup>たね</sup>を我にたまはず我の家の子わが嗣子<sup>よつぎ</sup>とならんとすと」

「我の家の子」○しも<sup>ハ</sup>

6 「六アブラム、エホバを信ずエホバこれを彼の義となしたまへり」

○ポーロは幾度も此語を引いた（羅四<sup>ローマ</sup>3）。

アブラハム神を信ず。其信仰を義とせられたり。此故に信仰による者はアブラハムの子なりと汝等知るべし（加三<sup>ガラ</sup>7）。アブラハムは正義の人と云ふことは出来ないが、彼は実に信仰の人であり、信ずと云ふ語は

始めて聖書にあらはれた。

第一六章

7 「エホバの使者つかひ曠野あらのの泉かたはらの旁、即ちシユルの路みちにある泉の旁にて彼に遭あひて」

「シユル」○シユルは壁の意にして、埃及人が東方よりの侵入者を拒がんが為に、スエズの地峽を横切りて建てたる石壁ありしより来れり。

13 「三ハガルおのれ己おのれに諭したまへるエホバの名をアタエルロイ(汝は見たまふ神なり)とよべり彼いふ我視たる後い尚く生いるやと」

○エジプト人の信ぜし神は深くかくれて現はれざるものにして、若し神を見れば死すべしと信じ居たり。

第一章

○アブラハムの一身よりキリスト教とマホメット教と出でたり。

1 「アブラム九十九歳の時エホバ、アブラムにあらわ顯れて之に言たまひけるは我は全能の神なり汝我前に行みて完全まつたかれよ」

○全能の神即ちエルシャダイ。アブラハムは罪を犯し、後久しく神より遠かりしなん故に十三年にして又彼に現はれ給ふやの厳しき名を以て現れたまひ。「アブラハムよ恐るゝ勿れ」と云ふ如き慰めの言葉ならずして「何をなしたる乎シツカリせよ」と云ふ如き詰責と警誠の声であつた。

5 「五汝の名を此後アブラムと呼ぶべからず汝の名をアブラハムおほく衆多の人の父とよぶべし其は我汝を衆多のおほく國民の父と爲ばなり」

「アブラム」○アブラムは高祖の意。されど國民や宗教の高祖たるに止らず。

15 「二神又アブラハムの言たまひけるは汝の妻サライは其名をサライと稱よぶべからず其名をサラと爲なすべし」

「サライ」○君らしき

「サラ」○女君（王母）

19 「一九神言たまひけるは汝の妻サラ必ず子を生ん汝其名をイサクと名なづくべし我彼および其後の子孫と契約を立て永久とこしなの契約となさん」

○アブラハムは契約の子「イサク」を与えられたりと雖も、ハガルの問題の為に神の初めの予定より其時期はおくれたるなるべし。アブラハムは肉体的に云へばユダヤ人、イシマエル人、ケトラ人、エドム人の祖先なれども、心靈的に云へば主キリストを信ずる我等凡ての祖先なり。

「イサク」○喜び笑ふ

23

「<sup>三</sup>是に於てアブラハム神の己に言たまへる如く此日其子イシマエルと凡て其家に生れたる者および凡て其金にて買たる者即ちアブラハムの家の人の中なる諸の男を將きたりて其陽の皮を割たり」

○割礼はやくより埃及アラビヤ等に行はる。マホメット教徒やイシマエルの例にならひて、十三才の時割礼を行ふ。故に此習慣はアブラハムより始めにあらず。其頃行はれたる衛生的のものが、アブラハムには心靈的の儀式として与へられたるなり。ポローは羅馬書に於て大に此問題を論じ、「割礼は靈に在りて儀文に非ず。心の割礼は眞なり」(羅二<sup>ロマ</sup>29)と云へり。心に伴はざれば儀文は凡て益なきもの也。然らば何故に割礼が神意に叶ひたる儀式となりしかと云ふに、自然主義の如く自然其まゝは不潔不完全にして、其一部を捨つるに非ざれば神の祝福を受くるを得ずとの意也。女に割礼を行はざるは、女子は従属的のものと見做されたればなり。

## 第一八章

- 1 「エホバ、マムレの橡林かしぼやしにてアブラハムに顯現あらはれたまへり彼は日の熱き時刻ころ天幕の入口に坐しめたりしが」  
 ○其一人はエホバにして他二人は天使なり。アブラハムは直に其神なることを認めたり。
- マムレとソドムに於ける待遇の差別は、神思と神罰を受くべき所以を偶然にあらはせり。
- 4 「請すこしふ少許の水を取きたらしめ汝等の足を濯あひて樹の下に休憩やすみたまへ」  
 「少許の水を取きたらしめ」○少許の水を取きたらしめくつをぬぎ。
- 6 「是六においてアブラハム天幕に急ぎいりてサラの許に至りて言けるは速に細麵こま三セヤを取り捏てパンを作るべしと」  
 「細麵三セヤを取り捏ねてパンを作るべしと」○最もよき、一斗以上、三人の客にすぎたり。
- 16 「斯六て其人々彼處かしこより起たちてソドムの方かたを望みければアブラハム彼等を送らんとて俱ともに行ゆけ」  
 ○高き地に立ちて平野を望む所まで行けり。
- 20 「エホバ又言給ふソドムとゴモラの號呼さけびおほい大なるに因より又其罪甚だ重おもきに因より」  
 ○酒宴の声さわぎ放蕩の声人を苦しめ殺す声、苦しめらる者が泣き叫ぶ声。
- 21 「我今下りて其號呼の我に達いたれる如くかれら全く行ひたりしやを見んとす若しからずば我知るに至らんと」  
 ○神の裁判は輕卒ならず。又不公平ならず。天使の出現は只アブラハムに語る為にはあらざりき。

第二〇章

○ペリシテ人はアブラハムの時は僅にゲラと其近傍に住みしが、漸次増加してモーセの時に至りては勇猛にして戦争を好む民となれり。後ユダヤ人に征服せられたり。アビメレクとは父なる王と云ふ意なり。

○ペリシテ人の王は代々アビメレクと云ふことは、恰もエジプトの王が代々パロと云ふが如し。士師記八 31 にあるアビメレクは勿論同名異人なり。

アブラハムの南にうつりしは新しき牧場を得んが為なりしなるべし。サラは其時猶美なりしなるべし故に、アブラハムはそれが為に害を受けんことを恐れ、二十年前エジプトに於て失敗せしと同じ過失を犯したり

(創一二11)。これに似たることはアブラハムも其妻リベカをいつはりて妹と称せること創二六7に在り。

1 「<sup>うっ</sup>アブラハム彼處より徒りて南の地に至りカデシとシユルの間に居りゲラルとじまれに寄留り」

〔彼處〕○マムレ

2 「<sup>ニ</sup>アブラハム其妻サラを我妹なりと言しかばゲラルの王アビメレク人を遣してサラを召入たり」

○アブラハムもエジプトに於ける時と同じ結果に陥らんとは思ひがけざりき。只アビメレクがサラを召入れたるは、主としてアブラハムの如き有力者と同盟せんとする結婚政略なりしならん。

4 「<sup>ただし</sup>四アビメレク未だ彼に近づかざりしかば言ふ主よ汝は義き民をも殺したまふや」

○四、七を見ればエジプトの時とおなじく疫病流行せしならん。

7 「七され然ば彼の妻を歸せ彼は預言者なれば汝のために祈り汝をして生命いのちを保しめん汝若歸ずば汝と汝に屬する者皆必死るべきを知るべし」

〔預言者〕 ○預言者とは神の力によりて言葉を出す人と云ふ意なり。

12 〓 13 「二三又我は誠にわが妹なり彼はわが父の子にしてわが母の子にあらざるが遂に我妻となりたるなり 一三神我をして吾父の家を離れて周遊ゆまめぐりしめたまへる時に當りて我彼に爾我等が至る處にて我を爾の兄なりと言へ是は爾が我に施す恩なりと言たり」

○アブラハムの詭辯

〔彼〕 ○サラ

〔爾〕 ○サラ

16 「一六又サラに言けるは視よ我爾の兄に銀千枚を與へたり是は爾および諸すべての人にありし事等ことごとくにつきて爾の目を蔽ふ者なり斯爾償贖つぐないを得たり」

○銀千枚にあたいするとの意。

○汝の月をおほふとは汝の面目をたもつ意。汝の名誉をこなはれたれば、其償金をはらふと云ふ也。アブラハム及其家族の感情を害したることをおそれたり。

〔爾〕 ○或は彼（アブラハム）

〔諸の人〕 ○アブラハムの家族

第二章

○イサクの生れたる時イシマエル十五才にあたる故に此時十七八才なり。神は殆ど（不明）はずと思はるゝまで、アブラハム等を愛したまへり。

9 「九時にサラ、エジプト人ハガルがアブラハムに生たる子の笑ふを見て」

「笑ふ」 ○嘲笑ふ

22 「三當時アビメレクと其軍勢の長かしらピコル、アブラハムに語て言けるは汝何事を爲にも神汝とともに在す」

○ピコルとはすべての人の口と云ふ意、即ち多くの人に指揮する官職の名なり。恰もアビメレクが人名にあらざるが如し。初め新来者として軽視し居たるペリシテ人も、アブラハムの事業の漸次発展するを見て其原因を神恩に帰し、之を将来葛藤を起さんことを恐れて、計約を結ばんとせり。アブラハムは其契約を結ぶに先だちて、ペリシテ人がアブラハムの掘りたる井を奪たること非難せり。

27 「二七アブラハム乃ち羊と牛を取て之をアビメレクに與ふ斯て二人契約を結べり」

○契約を結ぶには双方が動物を殺し、共に其肉を食ふを常とす。

33 「二三アブラハム、ベエルシバに柳を植としなゑ 永遠とこしなに在す神エホバの名を彼處よによ顛より」

○柳はギヨリウ檉柳か。檉柳は榮於乾沙之土其枝下垂而嫋娜其葉細而青緑春天碎花滿樹淡紅而可見。マナは此果実にあらずやとの説あり。記念の為と木をうえたるなり。

## 第二章

## ○復活信仰の獲得

○モリア山はエルサレムに在り、海拔二千五百尺、シオンの山と相對す。後にソロモンの神殿を立てたる所に於て、ベールシバを距ること四十哩なれば、アブラハムは三日を費やしたるなるべし。

アブラハムの生涯は此時すでに種々の障礙困難をとりさられ、愛児は青年に達し、平和愉快なる時に一大試験は突如として下れり。曰く其愛児を捧げよと。アブラハムの従順なる直にその命に従へり。神はアブラハムに其愛児を犠牲にせよと命じ給へる如く、その愛子イエスを犠牲にしたまへり。イサクも亦其父に従順なりしことイエスが天父に従順なりしが如し。主曰く「我心のまゝをなさんとするに非ず。みこゝろに任せたまへ」と。シリア地方の牡綿羊は今も其角は太く曲がれり。神がイサクをアブラハムに与へたるはアブラハムの為ではない。神の為である。神の大なる計画である。アブラハムよイサクは汝の子たりと雖も汝の物に非ず。我にさゝげよと。アブラハムは如何に明らかりしか。代り得るものならば、己れ自身その持物のすべてをさゝげて其かはりとなしたくありしなるべし。されど彼は神に従順であつた。かくて彼は神意のあるところをさとつた。智恵も肉体も我のすべてを神の為に用ゆべきである。「神第一」これ最も肝要なことである。神よ我をして亦此試みに勝たしめよ。犠牲献身とは何ぞ。自己の所有權を捨つることである！

20 「<sup>二〇</sup>是等の事の<sup>ち</sup>後アブラハムに<sup>つ</sup>告る者ありて言ふミルカ亦汝の兄弟ナホルにしたがひて子を<sup>う</sup>生り」

○ミルカはロトの妹。ナホルはアブラハムの弟。ハランはユーフラト川上流にしてアブラハムの父テラがウルを去り来り住める所、又死せる所也。

第二章

1 「サラ百二十七歳なりき是即ちサラの齡よわいの年なり」

○聖書のうち婦人にして死せる年を記すは只サラあるのみ。

○イサクを生みてより三十七年。

2 「サラ、キリアテアルバにて死り是はカナンかなんの地のヘブロンなりアブラハム至りてサラのために哀かなしみ且な哭なり」

○キリアテアルバと云ふはアルバの邑と云ふ意。アルバは偉丈夫にして膂力強く、アナキビトの先祖となれり。ヘブロンとも云ひマムレとも云ふ。エルサレムの南二十哩マイルベールシバの北二十哩の地に在り。

○アブラハムはサラの死にし時傍に在らざりしが如し。

3 「斯ひとごとてアブラハム死人の前より起ち出てヘテの子孫ひとごとに語りて言けるは」

○アブラハムはヘブロンヘブロンの近傍に來りし時、アネル、エシコル、マムレ等の如きアモリ人と交際しけるが（一四13）、此時全く別離なるヘテ人（ヘテはハムの孫にしてカナンの子なり（一〇15））と交れり。

4 「我は汝等の中の賓旅たびびとなり寄居者やどれるものなり請ふ汝等の中にて我は墓地はかどころを與あたへて吾が所有もちものとなし我をして吾が死人を出し葬ることを得せしめよ」

○神はアブラハムに其地方全体与へんと約し給ひたれども、其時は妻を葬る程の土地をも有せざりき。

○アブラハムは神が其地方を己れの子孫に与へ給ふを信じて、先づ墓地を買へり。

數百年後ユダがバビロンより帰り来るべきを信じて、エレミヤがアナトテの地を買ひしが如し（耶三二7、8）。

6 「我主よ我等に聽たまへ我等の中にありて汝は神の如き君なり我等の墓地の佳者を擇みて汝の死人を葬れ我等の中一人も其墓地を汝ををしてみて汝をしてその死人を葬らしめざる者なかるべし」

○偉大なる君、鄭重なる敬語 *mighty prince* アブラハムは甚だ富み、多くの従者を有し、數年前軍功を硯せり。

7 「是に於てアブラハム起ち其地の民へテの子孫に對て躬を鞠む」  
○丁寧なる作法頭と手と膝を地につけしなるべし。

9 「彼をして其野の極端に有るマクペラの洞穴を我に與へしめよ彼其十分の値を取て之を我に與へ汝等の中にてわが所有なる墓地となさば善し」

「マクペラ」○マクペラは二重の洞の意なり。ヘブロンほらあなの岡の西にあり。今其處に宏大なる回教徒の會堂ありて、其洞中に人の入るを禁ず。

15 「わが主よ我に聽たまへ彼地は銀四百シケルに當る是は我と汝の間に豈道に足んや然ば汝の死人を葬れ」  
「四百シケル」○シケルは目方にして、四百シケルは凡二貫目、五百円位にあたる。

16 「アブラハム、エフロンの言に従ひエフロンがヘテの子孫の聽る前にて言たる所の銀を秤り商買の中の通用銀四百シケルを之に與へたり」

○エフロンの銀をとれるは十一節の言に矛盾す。彼が只与ふると云ふは其本心に非ず。また四百シケルは其當時にありては甚だ高価なりき。

## 創世記 第 23 章

## 第二章

○サラの死せし時アブラハム百三十七才。イサクは三十七才。結婚せるはイサク四十才の時也。イサク、アラハムは血統と信仰とを汚さるゝことを恐れて、其周囲の強力なるカナン人、ヘテ人等と結婚することなく、彼が六十五年前に別れたる親族の住めるメソポタミヤのハランの地に僕を使せり。此忠実なる僕はアブラハムの仮相続人たりしエリエゼル（一五<sup>2</sup>）なりしならん。

6 「<sup>六</sup>アブラハム彼に曰けるは汝慎みて吾子を彼處に携かへるなかれ」

「吾子を彼處に携かへるなかれ」○たしかなる条件。神の約束の地をはなるゝ勿れ。

7 「<sup>七</sup>天の神エホバ我を導きて吾父の家とわが親族の地を離れしめ我に語り我に誓ひて汝の子孫に此地を與へんと言たまひし者其使を遣して汝に先<sup>な</sup>たしめたまはん汝彼處より我子に妻を娶るべし」

「言たまひし者」○即ち神

10 「<sup>一〇</sup>斯て僕其主人の駱駝の中より十頭<sup>と</sup>の駱駝を取りて出<sup>いで</sup>たり即ち其主人の諸<sup>もろ</sup>の佳物<sup>よきもの</sup>を手にとりて起<sup>たち</sup>てメソポタミアに往きナホルの邑に至り」

「佳物」○贈り物

「ナホル」○即ちハラシ。ナホルはアブラハムの弟にして、また其弟ハラシの娘ミルカをめぐりて八人の子を生めり。リベカはイサクにとりては従弟の娘にあたる。

29 「二九リベカに一人の兄あり其名をラバンといふラバンはせいで井にゆきて其人の許につく」

「ラバン」○ラバンは貪慾なる性質なりき。

47 「四七我彼に問て汝は誰の女なるやといひければミルカがナホルに生たる子ベトエルの女なりといふ是に於て我其鼻に環をつけ其手に手釧をつけたり」

「ミルカ」○妻

「ナホル」○夫

50 「五〇ラバンとベトエル答て言けるは此事はエホバより出づ我等汝に善惡を言ふあたはず」

○ベトエルは既に老ひ、実権はラバンに在りしならん。ラバンもエホバを信ぜし如し。去れど彼が人の形に作られたる小なる偶像テラピムをを拝せし（創三一 19）を見れば忠実なる者とは云ふべからず。

56 「五六彼人之に言エホバ吾途に福祉をくだしたまひたるなれば我を阻むるなかれ我を歸してわが主人に往しめよ」

○忠実なる僕は一刻も早く其音づれを主人に告げんと急げり。長途の疲れをも厭はず只一夜宿りたるのみ。

60 「六〇即ち彼等リベカを祝して之にいひけるはわれらの妹よ汝千萬の人の母となれ汝の子孫をして其仇の門を獲しめよ」

○敵愾心強し。神のこと、人生のことなどを黙想せるならん。

62 「六二茲にイサク、ラハイロイの井の路より來れり南の國に住居たればなり」

○サラ死してイサクはアブラハムとベエルシバに帰りしが如し。ラハイロイは十六 14にあるイシマエルの渴死

せんとせる時発見せる井なり。

イサクは温順にして沈思黙考を好み、リベカは活発にして決断よく、また性急なりしが如し。

64 「<sup>六四</sup>リベカ目をあげてイサクを見駱駝をおりて」

○駱駝を下るは一の敬礼なり。スリヤ（リベカの故郷）の結婚習慣は、他の亞細亞諸國に置けると同じく、之を娶りて妻となすまでは其面を見ることなし。新郎自ら新婦の覆衣をとり、其顔を見て喜べは天幕の外に在る人々も喜びの声をあげヨハ（約三29）。

第二章

1 「アブラハム再妻を娶る其名をケトラといふ」

○アブラハムはサラ死してより凡四十年生き存へたり。

6 「アブラハムの妾等の子にはアブラハム其生る間の物をあたへて之をして其子イサクを離れて東にさりて東の國に至らしむ」

「東の國」○アラビヤの辺

8 「アブラハム遐齡に及び老人となり年滿て氣たえ死て其民に加る」

○人のたましいが死後集る一定の場所あることを信じたるなり。

アブラハムの生涯はまた信、望と愛とを以て貫く信仰の人と云はるゝも宣也。

9 「其子イサクとイシマエル之をへテ人ゾハルの子エフロンの野なるマクペラの洞穴に葬れり是はマムレの前にあり」

「イサク」○七十五才

「イシマエル」○九十才

13 「三イシマエルの子の名は其名氏と其世代に循ひて言は是のごとしイシマエルの長子はネバヨテなり其次はケダル、アデビエル、ミブサム」

「ケダル」○マホメットはケダルの子孫なり。

18 「ハイシマエルの子等はハビラよりエジプトの前なるシユルまでの間に居住<sup>すみ</sup>てアツスリヤまでにおよべりイシ

マエルは其すべての兄弟等<sup>たち</sup>のまへにすめり」

「ハビラ」○ハビラは波斬灣頭

22 「二其子胎<sup>はら</sup>の内に争そひければ然らば我いかで斯てあるべきと言て往てエホバに問<sup>とひ</sup>に」

○ラテン訳に、我れ若しかくあるならば何故はらみしや。往きては普通イシリの場所は定められたり。

25 「五先に出たる者は赤くして躰中<sup>からだぢうけいぢうち</sup>裘<sup>なづ</sup>の如し其名をエサウと名けたり」

「エサウ」

○毛のある意。

○エサウの子孫をエドム人と云ふ。輕洮暴戾なり。兄弟二人は反対の方面に向かつて發達せり。口腹の慾の為

に特權を失へり。吾らも亦肉慾の為に天国に入る特權を失ふべからず。

26 「六其後に弟出たるが其手にエサウの踵<sup>くびす</sup>を持ち其名をヤコブとなづけたりベカが彼等を生し時イサクは六

十歳なりき」

「ヤコブ」○クビスを捕ふる意。

第二十六章

- 1 「アブラハムの時にありし最初の饑饉の外に又其國に饑饉ありければイサク、ゲラルに往てペリシテ人の王アビメレクの許にいたれり」
- ゲラルはベエルシバより西北にあたり、地中海岸に近し。何故エジプトに行くべからざる可は不明なり。或は曰く、当時エジプトに戦争ありしと。
- 5 「是はアブラハムわが言に順ひわが職守とわが誠命とわが憲法とわが律法を守りしに因てなり」
- アブラハムのすべてに従順なりしを示す。
- 6 「六イサク乃ちゲラルに居しが」
- 無抵抗主義実行の実例
- 7 「七處の人其妻の事をとへば我妹なりと言ふりベカは觀に美麗かりければ其處の人リベカの故をもて我を殺さんと謂て彼をわが妻と言をおそれたるなり」
- アブラハムもエジプトにて（創二二11）、又ゲラルに於て、其妻サラを妹と称せり（創二〇2）。アビメレクは其時のアビメレクの後嗣なりしなるべし。
- 12 「三イサク彼地に種播て其年に百倍を獲たりエホバ彼を祝みたまふ」
- 牧畜は變じて農業となれり。否牧畜と兼ねるに農業を以てせしなり。
- 22 「三イサク乃ち彼處より遷りて他の井を鑿けるが彼等之をあらそはざりければ其名をレホボテ（廣場）と名

けて言けるは今エホバ我等の處所を廣くひろしたまへり我等此地を繁衍ふえまひん」

「レホボテ」○レホボテはゲラルより南にあたれり。

25

「<sup>三五</sup>是に於て彼處に壇を築きてエホバの名を籲よび天幕を彼處に張り彼處にてイサクの僕井を鑿はれり」

○父のなす所にならひ、公然神を礼拝して親と神と交り、又隣人と平和の約を結べり。

34

「<sup>三四</sup>エサウ四十歳の時へテ人の女ユデテむすめとへテ人エロンの女バスマテを妻に娶めとれり」

○時にイサクは百才也。此結婚は両親の好まざる所なり。二十七章におけるイサクは百三十七才の時と研究す。

## 第二章

7 「<sup>七</sup>吾ために麿しかをとりきたり美味を製つくりて我にくはせよ死しぬるまへに我エホバの前にて汝を祝せんと」

○神の御心はすでにヤコブにありしや明かなり。さればかゝる詐偽の行をなさずとも可なりしならん。目的可なれば、方法は問ふ所に非ずと云ふべからず。その結果ヤコブは母を離れて困苦辛酸をなめざると得ざるにいたれり。

○ルーテル曰く、若し我れヤコブの位置に在らば戦慄して皿を落しゝなるべしと。我はヤコブを愛してエサウを恵めり（<sup>ロマ</sup>九13）。ヤコブは兄を歎き相続権を奪い、叔父をかたりて其羊を盗み、情に脆く困難に際して臆病であつた。

之に比較すれば、エサウは正直にして不覇独立の性に富み、自ら産をなして潔白の生涯を送つた。只ヤコブは神を信じ神にすがつた。エサウは自ら心に一点の疚しき所なしと誇り、神に依らずとも自ら義人たるべしと信ぜり。即ち傲慢の人であつた。碎けたる心を愛し給ふ神は、義人エサウよりも罪人ヤコブを愛し給ふた。

第二十八章

○ベールシバよりハランまでは少くも百六十里あり。ベールシバよりベテルまで十六里あり。

3 「願くは全能の神汝を祝み汝をして子女を多く得せしめ且汝の子孫を増て汝をして多衆の民とならしめ」

「全能の神」○エルシヤダイ

5 「<sup>五</sup>斯てイサク、ヤコブを遣しければパダンアラムにゆきてラバンの所にいたれりラバンはスリア人ベトエルの子にしてヤコブとエサウの母なるリベカの兄なり」

○イサクはヤコブに妻を娶るに方り、何故父アブラハムが己の妻を迎ふるが為めに、其僕をつかわし、多くの贈物をそなへてパダンアラムに行きしが如くなさざりや？と云ふに、イサクと兄エサウとの間は甚だ円満ならず。従て直にヤコブの妻を迎え来るとは好き結果を来たさざしと考へたるなるべし。されば之パダンアラムに使すことも、エサウには計らず。(エサウは何ひ知れりと雖も) ひそかに夜逃げ同様に殆ど一物ももたず出しやりたるなるべし。

11 「<sup>二</sup>一處にいたれる時日暮たれば即ち其處に宿り其處の石をとり枕となして其處に臥て寝たり」

○ベテルはハランより数百哩をへだたれる地にして、岩石多き比類なき荒蕪の地なり。エルサレムより北方十二哩、もとルズと云ふ。カナン人の市邑あり。ヨシユア之を攻めとりてベニヤミン支族に与へたり。

○ヤコブは神の恵みを失ひたりと思へるならん。ヤコブはなつかしき父をはなれ、知らざる親族を尋ね行くに

あたり、露宿して淋しく心細さを感じたるなるべし。然るに彼は神が何地にも居たまふこと、又何地よりも神の国に行き得るを見たり（約一<sup>ヨハ</sup>51）。又云ひけるは「我れ誠に汝等に告げん。天開けて神の使達人の子の上に昇り降りするを見ん」膏は神の恵又は聖霊のカタなり。傷をいやし糧の一部となりまた光を与ふるものなり。

18 「<sup>つと</sup>八かくてヤコブ朝夙に起き其枕となしたる石を取り之を立て柱となし膏<sup>あぶら</sup>を其上に沃<sup>そそ</sup>ぎ」

「之を立て柱となし」○記念碑

20 「<sup>二〇</sup>ヤコブ乃ち誓をたてていひけるは若神我とともにいまし此わがゆく途<sup>みち</sup>にて我をまもり食<sup>くら</sup>ふパンと衣る衣を我にあたへ」

「ヤコブ」○ヤコブは時に七十才位なりしなるべし。

第二章

5 「五ヤコブ彼等にいひけるは汝等ナホルの子ラバンをしるや彼等識しるといふ」

「ラバン」○ベトエルの子ラバン

15 「五茲にラバン、ヤコブにいひけるは汝はわが兄弟なればとて空むなしく我に役事つかふべけんや何の報酬むくひを望むや我に告よ」

「わが兄弟」○実はオイ

32 「三レア孕はらみて子を生子其名をルベンと名けていひけるはエホバ誠にわが艱苦なやみを顧みたまへりされば今夫我を愛せんと」

「ルベン」○子を見よ

33 「三彼ふたたび孕みて子を産みエホバわが嫌るるを聞たまひしによりて我に是をもたまへりと言て其名をシメオンと名けたり」

「シメオン」○聞く

34 「三四彼また孕みて子を生子我三人の子を生たれば夫今より我に膠漆したしまんといへり是によりて其名をレビと名けたり」

「レビ」○シタシム

35 「三五彼復妊またはらみて子を生子我今エホバを讚美ほめんといへり是によりて其名をユダと名けたり是にいたりて産こと

や  
みぬ

「ユダ」○イエスはユダの子孫として生まれたり。子サンビ。

第三〇章

○ラケルは美なれども短気なりき。サラがアブラハムにハガルを与へてイシマエルを生めるが如し。日本の大名の家庭の争等みなしかりし。

6 「六」ラケルいひけるは神我をかんが 監み亦わが聲をこえ 聽いれて吾に子をたまへりと是によりて其名をダンと名なづけたり」  
 「ダン」○審判の意。

8 「ハラケル我神の争をもて姉と争ひて勝ぬといひて其名をナフタリと名けたり」  
 「ナフタリ」○あらしひ、角力、いのりの意。

11 「二」レア福來れりといひて其名をガドと名けたり」

「ガド」○幸運  
 13 「三」レアいふ我は 幸さいはひ なり 女等むすめたち 我を幸なる者となさんと其名をアセルとなづけたり」

○アセルとは幸福。レアが神を思はず只己れの工夫の好結果を得たるを喜べるを見て、其信仰の衰へるを知るなり。而して其此に至れるは嫉妬によれり、競争によれり。ヤコブは其渦中に入りて翻弄せらるゝこと雇人の如く種馬の如し。

14 「四」茲に 麥苜むぎかり の日にルベン出ゆきて野にて 戀茄こひなす を 獲え これを母レアの 許もと にもちきたりければラケル、レアにいひ けるは請ふ我に汝の子の戀茄をあたへよ」

「ルベン」○レアの長子

「戀茄」○マンドラゲの一種

18 「<sup>二</sup>八レアいひけるは我わが<sup>一</sup>仕女<sup>つかへめ</sup>を夫に<sup>あた</sup>與へたれば神我に其値をたまへりと其名をイツサカルと名けたり」

「イツサカル」○報酬

20 「<sup>二</sup>〇レアいひけるは神我に<sup>よきたまもの</sup>嘉賚<sup>たま</sup>を<sup>をのこ</sup>賜ふ我六人の<sup>をのこ</sup>男子を生たれば夫今より我と偕にすまんと其名をゼブルン

となづけたり」

「ゼブルン」○住むと云ふ意、又敬ふの意。

21 「<sup>二</sup>其後彼<sup>をんなのこ</sup>女子を生み其名をデナと名けたり」

○デナとはダンと同じく審判の意なり。

ヤコブには他にも娘ありしが如し。

24 「<sup>二</sup>四乃ち其名をヨセフと名けて言ふエホバ又他の子を我に加へたまはん」

「ヨセフ」○加へる意

25 「<sup>二</sup>五茲にラケルのヨセフを生むに及びてヤコブ、ラバンに言けるは我を<sup>かへ</sup>歸して<sup>ふるさと</sup>故郷に<sup>ゆか</sup>我國に往しめよ」

○ヤコブのパダンアラムに來りしは女をめとらん為なりき。而してすでに四人の妻と多くの子を得たり。彼は故郷に帰らんことを思へり。浦島の如し。

27 「<sup>二</sup>七ラバン彼にいひけるは若なんぢの意にかなはばねがはくは留れ我エホバが汝のために我を祝みしを<sup>うらな</sup>トひ得たり」

「トひ」○うらなひと云ふ語は蛇と云ふ意なり。蛇を用ひて秘密を發見せんとせるものにして、異教的なるは明かなり。支那にては龜甲を用ひたり。

35

「三五」是に於て彼其日 牝山羊をやぎの斑入なる者 斑點まだらなる者を移し凡て 牝山羊めやぎの 斑駁ぶちなる者斑點まだらなる者都て身に白

色あ る者を移し又綿羊ひつじの中の凡て黒き者を移して其子等むすこらの手に付せり」  
○ラバンは一神教に非ず。多神教を信ぜり。貪慾くわんよくの人は自らしかならざるを得ず。

ヤコブの得んと云ひしは羊の黒きか斑まだらのもの、野羊のこりの白か斑まだらのもの。

36

「三六」而して彼己とヤコブの間に三日程みっかぢの 隔へだたりをたてたりヤコブはラバンの餘のこりの群ぐんを牧かふ」  
「三日程の隔をたてたり」○七里位か八里半の歩むべき三日ぢ。

第三二章

28

「<sup>二八</sup>其人いひけるは汝の名は重かさねてヤコブとなふべからずイスラエルとなふべし其は汝神と人とに力をあらそひて勝たればなりと」

○七十人訳とラテン訳には「汝神に対して力を有したれば人と争ひて勝を得べし」。

古き英訳には「汝は王者の如く神と人とに対して力あり」。

第三章

20

「<sup>二〇</sup>彼處に壇をきづきて之をエル、エロへ、イスラエル（イスラエルの神なる神）となづけたり」  
○其後数年其所に住みしならんかくて

第三章

○デナは十五、六歳なりしならん。シケム（三三・18）人の祭礼を見に行けるなり。

而して偶像祭のふるまひには多くの淫靡なること行はるゝを毎とす。掠奪結婚の風は其地方に行はれしなるべし。

23 「<sup>三</sup>然ばかれらの家畜と財産と其諸の畜は我等が所有となるにあらずや只かれらに聽んしからば彼らわ

れらとともにをるべしと」

○ハモルと其子シケムは其族人を承諾せしむる為に利益問題を提出せり。義不義を問ふ所に非ず。利不利によりて動く者多し。

24 「<sup>四</sup>邑の門に出入する者みなハモルとその子シケムに聴したがひ邑の門に出入する男子皆割禮を受たり」

「割禮」○神の約束の志るしたる割禮は、殺人の方便として用ひらるゝにいたれり。

25 「<sup>五</sup>斯て三日におよび彼等その痛をおぼゆる時ヤコブの子二人即ちデナの兄弟なるシメオンとレビ各劍をとり往て思よらざる時に邑を襲ひ男子を悉く殺し」

○復讐の事は主としてシメオンとレビの主唱する所なりき。而してヤコブは此残酷にいたく心をいためしことは、数年後其臨終の時にシメオンとレビに告げし言葉にて明かなり（創四九 5、6、7）。

第三章

○ベテルはシケムの南方七八里の所にあり。神は久しくヤコブが怠りたる約束を実行すべくヤコブに促し給へり。而して又ヤコブが久しく一掃し得ざりし偶像教を家族に命じてすてしめたり。

ルズー其処のなをベテル（神殿）と名けたり。其邑の名は初めはルズといへり（創二八19、20）。

2 「ニヤコブ乃ちその家人いへのみまおよび凡て己とともなる者にいふ汝等の中にある異神ことなるかみを棄て身を清めて衣服ころもを易かへよ」

「異神」○ラケルが父の家より盗み来たりしテラピムの如き物なり。

「身を清めて」○沐浴

4 「是四に於て彼等その手にある異神およびその耳にある耳環みみわを盡へてくヤコブに與へしかばヤコブこれをシケムの邊ほとりなる橡樹の下に埋たり」

「耳環」○護身符の如き意味にて用ひられたり。

7 「七彼かしこに壇をきづき其處そこをエルベテルと名けたり是は兄の面かほをさけて逃にぐる時に神此にて己にあらはれ給しによりてなり」

「エルベテル」○エル、ベテルはベテルのエロヒムと云ふ意にて、神の家の神と云ふなり。

8 「八時にリベカの乳媪うはデボラ死たれば之をベテルの下しもにて橡樹かしのきの下もとに葬れり是によりてその樹の名をアロン

バクテ(なげき)の橡(かし)といふ」

「リベカ」

○ヤコブの母

○リベカはヤコブの帰国以前に死にしたらん。而して其乳母デボラは非常なる老年にして母の如くヤコブに愛敬せられしなるべし。

9 以下15までは、二十八章及三十二章の再録なるが如し。

9 「九ヤコブ、パダンアラムより歸りし時神復またこれにあらはれて之を祝したまふ」

「歸りし時神復これにあらはれて」○行く時もあらはれかへりにも(創三二19)

18 「一八彼死にのぞみてその魂さらんとする時その子の名をベノニ(吾苦痛の子)と呼たり然ど其父これをベニヤミン(右手の子)となづけたり」

みぎのて

「右手の子」○右の手とは繁榮の意なり。

19 「一九ラケル死てエフラタの途に葬らる是即ちベテレヘムなり」

「ラケル」ラケルは五十才に達せざりしたらん。

21 「二一イスラエル復いでたちてエダルの塔の外さきにその天幕を張り」

「エダルの塔」○エダルの塔即ちミグダルエダルとは、群のモノミと云ふことにして、群羊を見張する家ありし

なるべし。

22 「三一イスラエルかの地に住る時にルベン往て父の妾ピルハと寝いねたりイスラエルこれを聞く夫それヤコブの子は十

二人なり」

「ルベン」○ルベンはヤコブの長子なりしが、其不品行によりて家督の権を失へり（創四九 3、4 参照）。

27 「<sup>二七</sup>ヤコブ、キリアテアルバのママレにゆきてその父イサクに至れり是すなはちヘブロンなり彼處<sup>かしこ</sup>はアブラハ

ムとイサクの寄寓<sup>やどり</sup>しところなり」

○ヤコブはベテルより父イサクの居るママレに行かんとして南に向つて進めり。

29 「<sup>二九</sup>イサク老て年滿ち氣息<sup>いき</sup>たえ死にて其民にくははれりその子エサウとヤコブ之をほうむる」

○ヤコブがママレに来りイサク対面し、其所に住みしが、十二年すぎて父イサクは死にたるなり。

第三十六章

○エサウ四十才の時へテ人ベエリの娘ユデテと、へテ人エロンの娘バスマテを妻にめとれり（創二六34）。

1 「エサウの傳はかくのごとしエサウはすなはちエドムなり」

「エドム」○紅鬘をわれにのませよと云ふことを以て彼の名はエドム（紅）と称へらる。

2 「エサウ、カナンの女むすめの中より妻をめとれり即ちへテ人エロンの女アダおよびヒビ人ヂベオンの女なるアナの女アホリバマ是なり」

○ヘテはある廣き土地の総名にして、ヒビ人とは村落又は田舎の意なるべし。

女の名の二十六章及二十八章と異なるは、その女の天幕ありし土地の名、若くは其女より生まれし民族の名なるべしと云ふ。

3 「<sup>三</sup>又イシマエルの女ネバヨテの妹バスマテをめとれり」

「バスマテ」○マハラテ

8 「<sup>八</sup>是に於てエサウ、セイル山に住りエサウはすなはちエドムなり」  
「セイル山」

○死海の南

○セイル山はエドム地方にあり。

12 「二」テムナはエサウの子エリパズの妾にしてアマレクをエリパズに生り是等はエサウの妻アダの子なり」

「アマレク」○アマレク人はパレスチナの南に於て盛となり、後にモーゼ、ヨシユア及サウロの時代に於てイスラエル人に反抗せしことあり。

15 16 「二」エサウの子孫の侯たる者は左のごとしエサウの冢子エリパスの子にはテマン侯オマル侯ゼボ侯ケナズ侯一六 コラ侯ガタム侯アマレク侯是等はエリパズよりいでたる侯にしてエドムの地にありき是等はアダの子なり」

○此等の諸族は各諸族の首長にして、後合同して一つのエドム王國となれり。ユダヤ人に此名を適用せしは二度にすぎず。即ちセカ 亞(ゼカリヤ) 九章 7 と十二章 5 以下にして日本譯には之をツカサ(牧伯)となせり。

20 「二」素より此地に住しホリ人セイルの子は左のごとしロタン、シヨバル、ヂベオン、アナ」

「ホリ人セイル」○ホリ人とは洞穴に住む人と云ふ意也。

セイルはセイル山よりとれる名なるべし。而してセイルちは毛深き意にして、其山地が森林多きより名けたるなるべし。又其地方には多くの洞穴ありしより穴居せる者多かりしなり。

24 「二」ヂベオンの子は左のごとし即ちアヤとアナ此アナその父ヂベオンの驢馬ろばを牧かひをりし時曠野あらのにて温泉みいだせを發見り

「温泉を發見せり」○温泉を發見せることは一の名譽して傳説せらる。今日も死海の東南方諸所に温泉あり。

31 「三」イスラエルの子孫ひとびとを治むる王いまだあらざる前まにエドムの地を治めたる王は左のごとし」

○王は血統によりて王位をつげんに非ず。

多分諸侯の集りに於て選舉せられしならん。此に八人の王の明記さる。ハダル王の死の記されざるは、此書の記されし時未だ王位に在りしならんと云ふ。而して此書の著者はモーゼならんと云ふ。

33 「<sup>三三</sup>ベラしに薨てボヅラのゼラの子ヨバブ之にかはりて王となる」

「ボヅラ」○ボヅラは又死海の東南地方に在りき。

37 「<sup>三七</sup>サラム薨て河のほとり旁なるレホボテのサウル之にかはりて王となる」

「河」○ユーフラテ也。

40 43 「<sup>四〇</sup>エサウよりいでたる侯の名はそのやから宗族とところ居處と名に循ひていへば左のごとしテムナ侯アルワ侯エテ

テ侯 <sup>四一</sup>アホリバマ侯エラ侯 <sup>四二</sup>ピノン侯 <sup>四三</sup>ケナズ侯テマン侯 <sup>四四</sup>ミブザル侯 <sup>四五</sup>マグデエル侯イラム侯是等はエド

ムの侯にして其領地のすまひ居處によりて言る者なりエドミ人の先祖はエサウ是なり」

○十五節以下に記せる諸侯の領地を表せるものなり。

第三十七章

○ビルハ及びジルバより生れたる子供は、レアラチルより生れたる子供よりいやしめられたるなるべし。而して一家に四人母ある十二人の子供の家庭は、種々の暗闘ありしは明かなり。而して彼等はヤコブが特にヨセフを愛するを見て、家督の権を奪がれんことを恐れたり（特にルベンにありて）埃及バビロン等に於て夢占ひを以て一の正規の学科となせり。ヤコブはたしかにヨセフに家徳権をゆづるの考なりしなるべし。

○牧羊者の衣は無地にして（白色）袖なく長さはひざに達するにすぎず。

ヤコブがヨセフを愛したるは最愛のラケルの子なるにもよるべく、又他の子供は母あれども、ヨセフとベニヤミンは母無きにもよりしなるべし。

12 「<sup>二三</sup>茲にその兄弟等シケムにゆきて父の羊を牧<sup>かひ</sup>めたりしかば」

「シケム」○シケムの地は其居所へベロンより北にして、其娘デナの事によりてハモルの一族を塵殺したる所なり。ヘブロン<sup>ヘブロン</sup>の北方直径約五十哩、ドタンは又其北直径十哩、二つの井又は二つの水たまりの意にして、ダマスコよりエジプトに下る通路にあたる。後預言者エリヤ此処に住めり。

18 「<sup>一八</sup>ヨセフの彼等に<sup>ちかづ</sup>近かざる前に彼ら之を遙に見てこれを殺さんと謀り」

○空気透明なればなり。

19 「<sup>一九</sup>互にいひけるは視よ<sup>ゆめみるもの</sup>作夢者きたる」

○ゆめみる者は又夢の主人との意あり。

アベルを殺せしカインは又此処に在り。はるばる尋ね来りたる兄弟をも穴に投げ入れ、平然としてパンを食へり。ヨセフの生涯は幾分イエスのそれに似たる所あり。

25

「<sup>三五</sup>斯して彼等坐てパンを食ひ目をあげて見しに一群のイシマエル人駱駝に香物と乳香と没薬をおはせてエジプトにくだりゆかんとてギレアドより来る」

「ギレアド」○ギレアドはヨルダンの東の国なり。

「乳香」○乳香はアラビヤに主として産す。橄欖科の一種の木の花より採るヤニにして、色白黄味苦辛火にやけば馨香あり。イスラエルの神の香壇にてやける香物の一なり。

「没薬」○没薬も亦アラビヤに生ずるトゲある灌木よりとる脂なり。味苦くして芳香あり。其他ナタフ（脂）紅海より出づる一種の貝殻をやきてつくれるシケレテ及アラビヤの木よりとれるヘルベナ等あり。埃及に於ては木乃伊をつくる為に多くの香料を輸入せり。

○ヤコブは其妻の一人は他の妻の子の為に辱められ、又多くの子供等の為にあざむかれさんざんのあはれなるメにあひたり。

○イシマエル人とはアブラハムの妾ハガルの子イシマエルより出でたるものにして、ミデアン人とはアブラハムの妻ケトラの子ミデアンより出でしものなり。故にその隊商の中にはイシマエル人もミデアン人もありしなるべし。或はアラビヤ地方ミデアンにすめるイシマエル人との意なるか。

## 第三章

○ヨセフは其主人に極めて忠実なりき。

埃及は風俗みだれてかゝること多く行はれたるならん。然るにヨセフは其召にありて断然之を斥けたり。

○ポテパルの榮えしは自ら善人たりし故に非ず。只信仰ある正しき奴隸を有せしによるし、奸惡なるソドムもその住民のうち少しの善人あらば救はれしなり。使徒パウロのローマに行かんせし時、同船せし人は只ボウロありし故に救はれしなりし(徒二七章)。されば我等イエスと共に在らば、之等にまさりて救はるゝなり。ヨセフに來れる誘惑は甚だ力あるものなりき。彼は或は其家のすべての所有者となることも得ん。惡魔イエスをいと高き山に携へ行き、世界のくにぐにとその榮華とを見せて、汝若しひれふして我を拜せば此等を皆汝に与ふべし(太四<sup>マタ</sup>9)。

22

「<sup>三</sup>典獄獄めいじうじにある囚人めいじうじをことごとくヨセフの手に付せたり其處になす所の事は皆ヨセフこれをなすなり」

○何故なる苦難も彼が神に於ける大信念を破る能はざりき。彼は囚人として最上の地位に止れり。

第四〇章

1 「一これらの事ののち後エジプト王のさかびと酒人とかしはで膳夫その主エジプト王に罪をかす」

「酒人と膳夫」○埃及に於ては酒人の長及膳夫の長は、甚だ重き職なりき。而して大抵貴族より選ばれたれば此二人も亦貴族なりしなるべし。

## 第四章

○エジプトにてはナイル川をオサイリスと云ふ男性の神（容貌も性質も美しき）となし、其河畔の沃地をアイシスと云ふ女性の神とし、此アイシス女神は牛の角と頭に有すとなせしより。従て牛は聖なるものとして尊ばれたり。河水多き年は豊年にして少なき年は凶年なり。

1 「二年の後、パロゆめみ夢ることあり即ち河の濱ほとりにたちて」

〔河〕○ナイル

2 「視るに七ななつの美うるはしき肥たる牝牛河よりのぼりて葦くわを食ふ」

○川に降りて冷水をあび。

7 「七しちその七のしなびたる穂かの七の肥こえみの實りたる穂を吞のみつく盡せり。パロめさめ寤めて見に夢なりき」

○呑みつくせりは、やせたる穂成長して肥へたる穂を蔽ひかくせるなり。イエスの所謂麦が荆棘に蔽はれしが如し。埃及の繁栄は全くオサイリスとアイシスより出でたり。東風はアラビヤのサバクより吹き来る熱風にして作物大害ありき。

8 「パロ朝におよびてその心安からず人をつかはしてエジプトの法術士とその博士を皆ことごとく召し之にその夢を述たり然ど之をパロに解ときうる者なかりき」

〔法術士〕○法術士は「天上の秘事をしるもの」として王の顧問たりき。而して彼等は祭司を兼ねたり。

16 「六ヨセフ、パロにこたへていひけるは我によるにあらず神パロの平安を告たまはん」

○かゝる折りには大抵己れの智識判断のまされるをほこり、高位高官に上らんとする誘惑にあふを毎とす。されどヨセフは榮を神に帰したり。其人格を想見すべし。

34 ○平安なるべきことを告たまはん。

「三四パロこれをなし國中こくちゆうに官吏くわんにりを置いてその七年の豊年うちの中にエジプトの國の五分の一を取たまふべし」

「七年の豊年の中東エジプトの國五分の一」○エジプトの租税は大抵收穫の十分の一なりければ、七年間は五分の一即ち二倍の租税となるわけなり。

42 「四二パロすなはち指環をその手より脱はつして之をヨセフの手にはめ之をしろぬの白布を衣せ金のくさり索をその項くびにかけ」  
「指環」○エジプトにては自己の印鑑は指輪の形をなして、各の指にはめられたり。

「白布」○白布は白き麻布にして非常に精巧なりき。

45 「四五パロ、ヨセフの名をザフナテパネアと名けまたオンの祭司ポテパルの女アセナテを之にあたへて妻となさしむヨセフいでてエジプトの地をめぐる」

○ヨセフは埃及に於ける最も有力なる人の女をめとれり。ヨセフが名をかへしは全く帰化せしものなり。

オンはナイル川の東にありたる學術宗教の盛なりし一都會なり。

46 「四六ヨセフはエジプトの王パロのまへに立し時三十歳なりきヨセフ、パロのまへを出てい遍くエジプトの地を巡れり」

○ヨセフは埃及に來りて既に拾三年を経たり。而していまだヨセフの見たる夢は實現せられず。されどヨセフ

51

は思ひてまてり。而して其賣られしことも獄につながれしことも、パロに見出されしことも、一にその約束を実現せらるべき道程なりき（詩一九篇）、人は黄金を鍛錬して滓なる罪を去られてまじり無きものとなり得るなり。火にて鍛はるゝ人は幸なるかな。

「<sup>五</sup>ヨセフその家子うひこの名をマナセわすれ（忘）となづけて言ふ神我をしてわが諸もろもろの苦難くるしみとわが父の家の凡の事をわすれしめたまふと」

○貧しくして神を信じ、富貴にして神を捨つるものあり。ヨセフは然らず。其信仰篤かりしことは、其子に命名せし事実によりても明かなり。ヨセフは今やこれまでのすべてのことが神のめぐみなりしことをさとりて感謝せり。すべてのことは彼を鍛錬せり。

○兄弟に苦められしこと。

## 第四章

○ベブロンより埃及までは凡二百哩あれば十日以上を費やせるなるべし。ヨセフの居たる所はデルタの東北隅なるゾアンなるべし。

五によれば、十人の兄弟は他の隊商等に同伴せるなりし。荒しく云ひしのみならず、まだ通辯を用いたり。

8 「ヨセフはその兄弟をしりたれども彼等はヨセフをしらざりき」

○父と眞の弟ベニヤミンの事なりき。

18 「一八三日におよびてヨセフ彼等にいひけるは我神を畏る汝等是なして生命をえよ」

「我神を畏る」○我神を畏るとは、我は單に嫌疑のみを以て人を罰するを好まず。ヨセフは此に神と云ふエロヒ

ムの名を用いたり。埃及に於てもエロヒムの名は用いられたり。

21 「三茲に彼らたがひに言けるは我等は弟の事によりて信に罪あり彼等は彼が我らに只管にねがひし時にその心の苦を見ながら之を聴ざりき故にこの苦われらにのぞめるなり」

○彼らは今かゝる不慮の禍に逢ふは、彼等が弟のヨセフを殺したる罪なりと考えたり。而して彼等はヨセフは実に既に死にしならん。又死なずとせば死にまさる苦役に服つゝありと思ひしならん。

24 「四ヨセフ彼等を離れゆきて哭き復かれらにかへりて之としたり遂にシメオンを彼らの中より取りその目のまへにて之を縛れり」

○順序より云えば第一子ルベンを残すべきなれども、ルベンはドタンにてヨセフに對し友情を施したれば、ヨセフは彼を苦しむることをやめたりしなるべし。

「シメオン」○ヤコブの第二子

28 「<sup>二八</sup>彼その兄弟にいひけるは吾金は返してあり視よ囊ふくろの中にありと是において彼等膽きもを消し懼おそれてたがひに神の我らになしたまふ此事は何ぞやといへり」

○彼等は又此事の為に、如何なる難儀の彼らの身に及ばんかを恐れたり、

## 第四章

○ベニヤミンを伴ひ行かざされば穀物を得べからず。従て餓死せざるべからざるにいたれり。而して長子ルベンは不品行により、シメオンとレビは殺人罪によりて家督の権を失ひたれば、其次子ユダ家督の権をつけり。彼は四十三章にある如く他の兄弟より実に高尚なる性質を有せり。

11 「<sup>二</sup>父イスラエル彼等にいひけるは 然<sup>し</sup>ば斯なせ汝等國の名物を器にいれ携へくだりて彼人に<sup>れい</sup>禮物とせよ乳香<sup>ちつ</sup>

<sup>サ</sup>少許、<sup>サ</sup>蜜少許、<sup>サ</sup>香物、<sup>サ</sup>沒藥、<sup>サ</sup>胡桃および<sup>サ</sup>巴旦杏<sup>はだんきやう</sup>」

「蜜」○蜜はブドウより取りたるものなり。

14 「<sup>二</sup>ねがはくは全能の神その人のまへにて汝等を<sup>あ</sup>矜恤<sup>はれ</sup>みその人をして汝等の他の兄弟とベニヤミンを放ちかへさしめたまはんことを若われ子に別るべくあらば別れんと」

○ヤコブは今日に至るまで、全能の神は何時も困難の時にヤコブを助け給ひしを想ひ、又神の助けに依るほか全く他に途なきをさとり、全く神の摂理に依り頼むにいたれり。而してベニヤミンとも分るゝことが神の御旨ならば、其御旨に服従せんとし、アブラハムがモリヤの山に於てイサクを捧げんとせる折りの心に似たり。

18 「<sup>二</sup>人々ヨセフの家に導かれたるによりて懼れいひけるは初めにわれらの囊にかへりてありし<sup>か</sup>金の事<sup>ね</sup>のために」

我等はひきいれらる是われらを<sup>とりおさ</sup>抑留<sup>おさ</sup>へて我等にせまり執へて奴隸となし且われらの<sup>ろ</sup>驢馬<sup>ば</sup>を取んとするなりと」  
○彼らは始め埃及に行きし時はあらあらしく取扱はれ、今はまた非常に異りたる待遇をうくるを見てあやしみ

26

恐れたり。

「<sup>二六</sup>茲にヨセフ家にかへりしかば彼等その手の禮物を家にもちきたりてヨセフの許にいたり地に伏てこれを拜す」  
○ヨセフが幼時見たる夢は今事実となれり。成就せられるなり。

## 第四章

○ヨセフが其兄弟に對して行ひたる試みなり。而して彼等は幸にして其試みに及第せり。

13 「三かかり斯有しかば彼等その衣を裂きおのおのその驢馬に荷を負せて邑まちにかへる」

○衣を裂くはかなしみとうれひの志るしなり。

ヨセフは彼等十人が以前ヨセフをにくみて賣りし如く、ベニヤミン一人を捨つるや否やを試みたるなり。若ししかせばヤコブは其十人の兄弟を捨てしならん。されど彼等はベニヤミンと禍を分かつたんとせり。

十一人の兄弟等はエジプトに於て以外の厚き待遇をうけ、シメオンも許され、又其正直なることも認められ、喜び勇んで帰國の途に上がりしに、形勢忽ち一変し非常の驚きと

失望に投ぜられたり。其有様は容易に想像し得ざるほどなりしならん。されど彼等は無罪を信ぜり。

云ふが如き罪あらば、罪人は死し吾等は奴隸たらんと断言せり。

然るにベニヤミンの袋あらんとは。此時若し彼等にヨセフに對せし如きニクミシットがベニヤミンに對してもありしならば、彼等はベニヤミン一人を捨てしなるべし。

ヨセフの知らんと欲せし所は主として此にあり。而して彼等はまた昔日の彼等に非ず。

彼等は父を愛し又ベニヤミンをも愛したり。而して彼等にかゝる変化を來たしたるは、年令の進みまた人格進みたるにもよるべしと雖も、其境遇の困難（キキン）が彼等ををまじめならしめたるにもよるべし。

28

「二八その一人出いでてわれをはなれたれば必ず裂さきころされしならんと思へり我今にいたるまで彼を見ず」  
○二八を見れば彼等はヨセフを賣りしことを其後絶對に秘し居りしこと明かなり。

## 第四章

○ヨセフは其兄弟に對しては大なる恨みありしも、能く宏量を以て之を許したり。

○羅ロマ(八28)に曰く、又凡ての事は神の旨によりてまねかれたる神を愛する者の為に悉く働きて、益をなすを吾等は知れりと。

○ヨセフの賣られたることも、つまりヤコブ及其子供等大にしてはユダヤ人全体の為に幸福となれり。

ユダがイエスを賣りしことも、イエスを十字架に釘けしことも、されど之を以てユダの行ひしこと、ヤコブの兄弟の行ひしことが美なりと云ふには非ず。罪はどこまでも罪なり。神は汚れたるものをも化して美なる花味ある食物となすが如し。大なる哉ヨセフの信仰！

5「五されど汝等我をここに賣しうりをもて憂うれふるなかれ身を恨うらみるなかれ神生命いのちをすくはしめんとて我を汝等さきの前につかはしたまへるなり」

○ヨセフは兄弟等が己に對して犯せる罪を思ひて恐れんことを察し、兄弟をして心配せざる様意せり。キリストも亦然り。主は云ひ給ふ、汝等の罪ゆるされたりと。然れども罪人は之を信ぜざる者多し。

10「一〇汝ゴセンの地に住べし斯汝と汝の子と汝の子のおよびなんちの羊と牛並に汝のすべて有ところの者われちかくの近方ちかくにあるべし」

○普通の人情よりすれば、己れ尊貴の位にのぼらば、賤しき父母を耻づる者もあるべし。されどヨセフの忠実

なる決してかゝることなかりき。

ゴセンは四十七章にはレアムセスとあり。ナイル川と今のスエズ運河との間の北埃及の地也。

28

「<sup>二八</sup>イスラエルすなはちいふ足りわが子ヨセフなほ生いきをるわれ死しなざるまへに往て之を視ん」

○ヤコブはエジプトに行くにつきては躊躇せしなるべし。アブラハムもエジプトに行けり。而してサラの事によりてエジプトを去れり(十二章)。イサクも饑饉の為にエジプトに下らんとせしが、神之を止めたまへり(二六<sup>2</sup>)。されどヤコブは思ひきりてエジプト行に決せり。而してそは又神意にかなへり(四六<sup>3</sup>)。

第四十六章

4 「我汝と共にエジプトに下るべし亦かならず汝を導みちびきのぼるべしヨセフ手をなんぢの目の上におかんと」

「手をなんぢの目の上におかんと」

○手を目の上におくは人の死せんとする時、近親の人その人の目を閉づ。

日本に於て臨終に水をのましむるが如し。

7 「七ヤコブかくその子と子のおよびその女むすめと子の女すなはちその子孫まじこを皆ともなひてエジプトにつれゆけり」

○ヤコブに多くの娘ありしが、デナのみ名を記せり。彼に不幸の歴史ある故なり。

又孫娘サラの名を記せり。大抵婦人の名はのせざるを常とす。(創三五章参照)

15 「二五是等および女子むすめデナはレアがパダンアラムにてヤコブにうみたる者なりその男子女子なんしによしあはせて三十三人なり

き」

「その男子女子あはせて三十三人なりき」○レアの生める一族。

18 「一八是等はラバンがその女レアにあたへたるジルパの子なり彼是等をヤコブにうめり都合あはせて十六人」

「ラバン」○ヤコブの養父

「ジルバ」○仕女

21 「二三ベニヤミンの子はベラ、ベケル、アシベル、グラ、ナアマン、エヒ、ロシ、ムツピム、ホパム、アルデ」

○ベニヤミンに子供あるは其時の事にあらず後の事なり。他の人々につきても然り。

そのうちには埃及に下りて後に生れたる者も勿論あるわけなり。

25 「<sup>二五</sup>是等はラバンがその女ラケルにあたへたるビルハの子なり彼これらをヤコブにうめり都合七人」

「ビルハ」○仕女

27 「<sup>二七</sup>エジプトにてヨセフにうまれたる子二人ありヤコブの家の人のエジプトにいたりし者はあはせて七十人なりき」

○六十六人にヤコブとヨセフとヨセフの二人の子を加へて七十人となるなり。

31 「<sup>三一</sup>ヨセフその兄弟等と父の家族とにいひけるは我のぼりてパロにつげて之にいふべしわが兄弟等とわが父の家族カナンの地をりし者我のところに来れり」

○ヨセフはゴセンの地が牧畜に適せるを知りしと。又彼等が王の居る所に住まば、嫉妬奸計に陥るべきをおそれたり。誠に容易周到と云ふべし。

第七章

○ゴセンの地にはヤコブ等の来る以前より、王の家畜は其所に養はれ居たり。殊にキキンの為に王の家畜は大に増加せり（16、17）。

埃及王は太陽の子孫たる神にして凡ての仁徳を有するものとせられ、之に謁見するには、始めパロの聖徳心を煩する歌を奏し、非常なる嚴肅なるものなりき。

○今日の對米問題然れども、日本人の排斥せらるゝ理由は、日本の軍国主義にあり。而してその為に在外人はくるしめられる。

9 「九ヤコブ、パロにいひけるはわが旅路の年月は百三十年にいたる我が齡の日は僅少にして且惡かり未だわが先祖等の齡の日と旅路の日にはおよばざるなり」

○人生を旅路にたとふるは古今東西大抵一致せる思想して、眞の住家は此世にあらず。

此世は天路歷程の一部に過ぎずとなす也。而してヤコブは己れの旅路は祖父アブラハム、父イサク等に比して惡しかりしと云ふなり。

11 「二ヨセフ、パロの命ぜしごとくその父と兄弟に居所を與へエジプトの國の中の善き地即ちラメセスの地をかれらにあたへて所有となさしむ」

「ラメセス」○ラメセスは即ちゴセンの地にして、ゴセンはラメセスの一部なり。

20 「二〇是に於てヨセフ、エジプトの田地をことごとく購とりてパロに納る其はエジプト人饑饉にせまりて各人その田圃を賣たればなり是によりて地はパロの所有となれり」

○土地の所有権は古來国により、また時によりて異り、或は王の所有とし、国家の所有とし、又私有となせり。

ヨセフの時の改革は我国大化の新政の如く、非常なる改革にして、又中央集権の進歩なりき。

糧の欠乏が如何に人をくるしむるか、我等日用の糧を与へらるゝことを感謝せざるべからず。

29 「二九イスラエル死る日ちかよりければその子ヨセフをよびて之にいひけるは我もし汝のまへに恩を得るならば請ふなんぢの手をわが髀の下にいれ懇に眞實をもて我をあつかへ我をエジプトに葬るなかれ」

「なんぢの手をわが髀の下にいれ」

○汝の手をモゝの下に入れよとのことは二十四章二節に、アブラハムその僕にちかはしめし時云ひしに同じ。

30 「三〇我は先祖等とともに偃んことをねがふ汝われをエジプトよ昇いだして先祖等の墓場にはうむれヨセフいふ 我なんぢが言ることくなすべしと」

「先祖等の墓場」○カナンのマムレ附近

31 「三一ヤコブまた我に誓へといひければすなはち誓へりイスラエル床の頭にて拜をなせり」

「床の頭にて拜をなせり」

○床の頭と訳せるは、杖によりてと訳すべしとの説も在り。

○神よ我等の旅路をして平安ならしめ給へ。

第四八章

○ヨセフはエジプトの大臣として、其家系を立てんことを欲せず。神につけるアブラハムの子孫の一として、其家を立てんことを欲せり。大なる信仰なり。

○ヤコブの生涯の総計算の時は来れり。艱難多き生涯なりき。されど神毎に共に居りたまひたる生涯なりき。

3 「三しかしてヤコブ、ヨセフにいひけるは昔に全能の神カナンの地のルズにて我にあらはれて我を祝し」

○ヤコブが初めてハランに赴かんとし、ハランに於て石を枕にして寝ね、天の使がハシゴを上り下りせるを見たるときなり。

「全能の神」○エルシャダイ

4 「四我にいひたまひけらく我なんちをして多く子をえせしめ汝をふやし汝を衆多の民となさん我この地を汝の後の子孫にあたへて永久の所有となさしめんと」

「多く子」○十二人

5 「五わがエジプトにきたりて汝に就まへにエジプトにて汝に生れたる二人の子エフライムとマナセ等はわが子となるべしルベンとシメオンのごとく是等はわが子とならん」

○ヨセフは功ある子なりければ、其二人の子はエジプト人の母よりエジプトに於て生れたれども、ヤコブは之を養つて我子となさんとするなり。神がユダヤ以外の民も其心に叶ふものを、神の子となし給ふが如し。(キ

リストの功績によりて)

「ルベンとシメオン」○レアの生みたる

7 「七我事をいはんに我昔パダンより來れる時ラケル我にしたがひをりて途みちにてカナンの地に死しり其處はエフラタまで尚途の隔あるところなりわれ彼處にて彼をエフラタの途にはうむれり(エフラタはすなはちベテレヘムなり)」

○パダンアラムは即ちハラシナリ。而してヨセフとベニヤミンの母なるラケルは、ヨセフが最も愛したる戀女房なりき。其墓はベテレヘム附近にあり(創三五19)。

今回々教の寺院其墓の上にある。

ラケルの死にたるは、ベニヤミンを生みたるが其産重かりし為なり。

8 「八斯ことどもてイスラエル、ヨセフの子等を見て是等たれは誰なるやといひければ」

○ヤコブの目くらかかりし為なり。ヨセフの子は十八才乃至二十才位なりしなるべし。

9 「九ヨセフ父にいふ是は神の此にて我にたまひし子等なりと父すなはちいふ請ふ彼らを我所わがもへにつれきたれ我これを祝せんと」

○子等も兄弟も友もみな神の与へたまひしものなり。

12 「二ヨセフかれらをその膝の間よりいだし地に俯ふして拜はいせり」

「地に俯て拜せり」○父の祝福を得んとせし故也。

15 「二五斯してヨセフを祝していふわが父アブラハム、イサクの事つかへし神わが生れてより今日まで我をやしなひた

まひし神」

16 「永遠より永遠に在す神。守り給ふ聖霊の神。あがない給ふ子たる神。三位一體の神よ。  
 「一六 我をして 諸の災禍を 贖はしめたまひし 天使 ねがはくは是 童子等を 祝たまへねがはくは是等の者

わが 名とわが父アブラハム、イサクの名をもて 稱られんことをねがはくは是等地の中に 繁殖がるにいた  
 れ」

○我エホバ汝の神は嫉む神なれば、我をにくむ者に向ひては父の罪を子にむくひて、三四代に及ぼし、我を愛  
 し我がいましめを守る者にはめぐみを施して、千代に至る也（申五 9）。

19 「一九 父こぼみていひけるは我知るわが子よわれしる彼も 一の民となり彼も 大なる者とならん 然れどもその  
 弟 は彼よりも大なる者となりてその子孫は多衆の國民となるべしと」

「彼」○兄

22 「二三 且われ一の分をなんちの兄弟よりもおほく汝にあたふ是わが刀と弓を以てアモリ人の手より取たる者なり」  
 ○ヤコブ其女デナのことによりてアモリ人をうちて其邑をうばへり。或は曰く、此の地はヘテ人ハモルの子よ  
 り買ひし所なれども（三三 19）、將來其子孫が再び刀と弓を以てアモリ人の手よりとることを豫言せるなり  
 と。（エフライムの支派は、ユダを除けばイスラエルのうち常に最も強き支派なりき）

第四十九章

○豫言と祝福、神の摂理は、神の自由なりと雖も、神は單に専断給ふに非ず。能く人の性質行状等を察して處置し給ふなり。

3 「ルベン汝はわが冢子うひしわが勢わが力の始はじめ威光の卓越すぐれたる者權威の卓越たる者なり」

○長子は最も純粹にして最も強き血肉をつぐ者と信ぜられたり。而して一家のうちヤコブにつぎて最勢力あるはルベンたるべきなれど、嗣業を得ず。

4 「汝は水の沸あがるがごとき者なれば卓越すぐるを得ざるべし汝父の床とこにのぼりて洩けがしたればなり嗚呼彼はわが寢床ねどこにのぼれり」

○かかる罪は容易に許し難き罪、忘れ難き罪也。其子孫に士師、王、豫言者の秀れたる者一人も出でず。ヨルダンの東に住みて早く滅亡せしが如し。罪は恐るべき也。

「水の沸あがるがごとき者」○感情強く意志弱きを云ふなり。

5 「シメオン、レビは兄弟なりその劍つるぎは暴逆の器なり」

○同じ母より生れたる彼等シケム人を攻撃せしのみならず、常に怒りやすかりしなり。柔和なる者は幸也。その人は地をつぐことを得べかれば也。

「シメオン、レビ」○モーゼはレビ人なり。

6 「我魂よかれらの席にのぞむなかれ我たから寶よかれらの集會あつまりにつらなるなかれ其は彼等その怒にまかせて人をこ

ろしその意こころにまかせて牛を筋截すじきりたればなり」

〔席〕○席とは想談する秘密室なり。

〔寶〕○宝とはさかえの意にして、またたましひを云ふ。

〔筋截〕○手を筋きるとは破壊の意也。古き英訳には壁を破るとあり、彼等の子孫は一所に住むことを許されず。

されど彼等は祭司たることを得たり。

8 「ユダよ汝は兄弟の讀る者なり汝の手はなんぢの敵の頸くびを抑へんなんぢの父の子等なんぢの前に鞠かがまん」

○ユダも過ちありといへども、彼は感情も改まり善に向へり。シメオンレビは怒り易しも、ユダは大勇也。容

易に動ぜず。されど一度動く時はシメオンのごとくいさまし。

彼は第四子なれど、家督権を与えられ、其子孫よりダビデソロモン生れ、イエスキリスト出で給へり。牝獅

子は子を育つる時は却つて牡獅子より勇まし。ユダ族の軍旗に獅子あり。

9 「ユダは獅子の子の如しわが子よ汝は所掠物えものをさきてかへりのぼる彼は牡獅子をじしのごとく伏し牝獅めじしのごとく

蹲うづく まる誰か之をおこすことをせん」

〔所掠物をさきてかへりのぼる〕○所掠物をさきて平地よりかへり山にのぼる。

〔おこす〕○怒らす。

10 「杖のりユダを離れず法たつを立る者その足の間をはなるることなくしてシロの來る時にまでおよばん彼に諸もろもろの

民たみ したがふべし」

○杖とは王者のとる杖。足の間とは子孫の意。シロは平和又は平和を与ふる者の意也。キリストさせるが如し。  
ヤコブの時己にキリストにつける豫言あるは驚くべしと雖も、神はアダム等のだらくの時に於てすでに之を  
計画したまへり。

11 「二彼の驢馬を葡萄の樹に繋ぎその牝驢馬の子を葡萄の蔓に繋がん又その衣を酒にあらひ其服を葡萄の汁  
にあらふべし」

○土地は肥え平和の動物は重用せられ：曰くガルバリ山に血をながせる意なりと。あまり細に入らざるカタよろしかるべし。

13 「三ゼブルンは海邊にすみ舟の泊る海邊に住はんその界はシドンにおよぶべし」

○ゼブルンは商業の民となるべし。進んで海外に發展をはかり、イツサカルは家に止りて静かに農業者たるに  
満足す。

16 「六ダンはイスラエルの他の支派の如く其民を鞫かん」

○ダンの子孫にサムソンあり。強敵ペリシテ人を破れり。愛国心、敵愾心に富めり。

19 「九ガドは軍勢これにせまらんされど彼返てその後うしろにせまらん」

○ガドは注意深く且つ機敏也。

20 「二〇アセルよりいづる食物は美るよかべし彼王の食くらふ美味をいださん」

○アセルの子孫は地中海の海にすみ、土地こえて善き食物を出せり。

21 「二ナフタリははなた釋れたる塵めじかのごとし彼美言をいだすなり」

○ナフタリはガリラヤの北方の山地に住めり。山地に住める民の特質として自由を愛し、詩歌に長ずべし。

ガリラヤ人は即ちナフタリ人也。

24

「<sup>二</sup>然どかれの弓はなほ<sup>つよ</sup>勁くあり彼の手の<sup>ひぢ</sup>臂は力あり是ヤコブの全能者の手によりてなり其よりイスラエルの<sup>い</sup>磐なる牧者いづ」

○神を二人人格となす牧者は即ち神也（詩八〇一）。

○モーゼにかはりてユダヤ人をカナンの地にみちびきしヨシユアは、ヨセフの子エフライムの子孫也。

26

「<sup>二</sup>六父の汝を祝することはわが<sup>ちち</sup>父祖の祝したる所に<sup>まがり</sup>勝て<sup>とこしなへ</sup>恒久の山の<sup>かぎり</sup>限極にまでおよばん是等の<sup>めぐみ</sup>祝福はヨセフの<sup>かうへ</sup>首に<sup>き</sup>歸しその兄弟と別になりたる者の<sup>いたたき</sup>頭頂に歸すべし」

○王サウロ其子ヨナタン、皆ベニヤミン族也。

武術にたけ、弓と石投に長ぜり。モーゼの祈りのうちにもベニヤミンは防禦者にして、其守りの下に在る者は安然なりとあり（申三三12）。ヤコブは感謝して神の許にかへり行けり。ヨセフはたしかにキリストのカタ也。

「父祖の祝したる」○えらばれたる。

「別になりたる者」○尚武の民。

32

「<sup>三</sup>三彼<sup>はただけ</sup>田とその中の<sup>うち</sup>洞穴は<sup>ほらあな</sup>へテの子孫<sup>ひとびと</sup>より<sup>かひ</sup>購たる者なり」

「へテの子孫」○百四七才。

第五〇章

○埃及人は靈魂の不滅を信じ、また復活を信じたるを以て、其肉体を保存すべくつとめたり。

其方法は、脳と内臓を去り、地瀝青チヤンを以て其空所をみたせり。又之を天然の炭酸曹達液に浸し、香料を撒布せる麻布を以てつゝめり。

3 「三すなはち之がために四十日を用ふ其は尸しかばねに斃くすりぬるにはこの日數を用ふべければなりエジプト人七十日の間之がために哭なげけり」

○ヤコブの死をきゝ埃及人の泣けるは大臣の父なるが為也。埃及に於ても支那と同じく、雇はれて泣くを職業となす者もありき。

4 「四なげき哀哭の日すぎし時ヨセフ、パロの家にかたりていひけるは我もし汝等の前に恩惠めぐみを得るならば請ふパロの耳にまうして言へ」

○ヨセフは喪中にあり、直接パロの前に出づること能はず。

9 「九また車と騎兵ヨセフにしたがひてのぼり其隊くみははなはだ大なりき」

○エジプト人は葬式を甚だ盛になせり。

11 「二その國の居人ひとなるカナン人等アタデの禾場うちばの哀哭を見て是はエジプト人の痛くなげくなりといへり是によりて其處の名をアベルミツライム(エジプト人の哀哭)と稱とふヨルダンの外さきにあり」

○ヨセフ等が埃及より来りたるをきゝてかく云へるなり。

15 「<sup>二五</sup>ヨセフの兄弟等たちその父の死しにたるを見ていひけるはヨセフあるいはわれらを恨むることあらん又かならず

われらが彼になしたる諸もろもろの惡にむくゆるならん」と

○人は己の心を以て他人の心を忖度するもの也。ヨセフの兄弟もヨセフの心をさとることを得ず。彼等に對する行意も父在るが為なりと考へ、今や父死せりヨセフの復讐の手は彼等の上にに下るべしと恐れたり。

ヨセフは兄弟等のいやしき心、己れの誠心の彼等に了解せざれざるをかなしみて泣けり。約ヨハ十一章にラザロの死を哀しむマリアマルタ等を見てイエス涙を流したまへりの涙は、同情の涙也。ヨセフの兄弟は、ヨセフの心をさとらざりしと雖も、其旧惡をヨセフの前に謝せしは立派なる態度なり。

23 「<sup>三</sup>ヨセフ、エフライムの三世の子女こどもをみるにいたれりマナセの子マキルの子女もうまれてヨセフの膝にありき」

○エフライムとマナセルは、ヨセフの子にして、ヤコブに養はれたるもの也。三世の子女とは曾孫也。

25 「<sup>二五</sup>ヨセフ神かならず汝等をかへり見たまはん汝らわが骨をここよりたづさへのぼるべしといひてイスラエルの子孫こらを誓はしむ」

○遺骨を其故國に葬られんことを望むは普通の人情也。されどヨセフやヤコブの場合は單に人情とのみ云ふべからず。そはカナンの地が神に約束されたる地なることを深く信じたるものにして、今日のユダヤ人の希望も其地に皈らんこと也（埋骨豈唯墳墓地人間到處有青山の詩はあれども）。ヨセフの骨はモーゼがユダヤ人を率ひてエジプトを出づる時に携へ出でたり（出一三19、書ヨシ二四32、徒七16）。

ヨセフの生涯は常に信仰を失はず、神の約束を疑はず、順境にも逆境にも毎に神の榮光を輝かせり。